

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語と外国語との照応現象に関する対照研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上野, 田鶴子, 正保, 勇, 田中, 望, 菱沼, 透, 日向, 茂男, UYENO, Tazuko, SHOHO, Isamu, TANAKA, Nozomi, HISHINUMA, Toru, HINATA, Shigeo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001092

日本語と外国語との照応現象に関する対照研究

上野田鶴子 正保勇 田中望 菱沼透 日向茂男

目 次

- I. 問題の所在 (田中望)
- II. 研究の枠組み (田中望)
- III. 照応関係を示す「この／その＋名詞」とそれに対応する英語の表現
(上野田鶴子)
- IV. 「その」の機能と対応する中国語の表現 (菱沼透)
- V. itu と -nya に関する一考察——日本語との比較を通して——
(正保勇)
- VI. 「この／その＋名詞」とそれに対応するポルトガル語の言い方(1)
(日向茂男)
- VII. 資料『虱』

I. 問題の所在

言語には、ほぼ普遍的に、先行のコンテキスト内のある要素を、後続する文のなかで別の形式（すなわち代用形）をもって代用する規則が組み込まれている。こうした現象を、一般に、照応現象と呼んでいる。

照応現象は、言語に普遍的な現象と考えられるが、その発現形式は、各言語によって異なっている。言語教育の現場では、照応に関する問題は、教育方法が確定しておらず、かなり教えにくい問題である。その原因は、一つには、照応現象についての研究、とくに各国語の対照研究が進んでいないことにあるといえよう。日本語教育について言えば、英語を母語とする学習者が

その母語の干渉によって、次のような誤用を犯すことが観察される。

(1) きのもう映画を見に行きました。あれはとてもおもしろい映画でした。

(2) I went to see a movie yesterday. That was very interesting.
こうした誤用の個々の例に対して、その場合、日本語ではどう言うべきだということは指摘できても、誤用を防ぐために、明確な規則を提示して、その規則に従ってある言語形式を選択すれば正しい日本語の文が作れるというように教育できないのは、まさしく、日本語に関する照応の規則が解明されていないからであろう。

われわれは、こうした現状を考え、最終的に教育に役立てることを目指して、各国語と日本語との照応現象に関する対照研究を計画した。対照すべき言語は英語、中国語、インドネシア語、ポルトガル語の四言語である。言語の選択は現実上、参加する研究者によって決定されることになったが、結果的に日本語学習者の多い言語が選ばれ、しかも、代表的な語族から一つずつ言語が選ばれることになった。

この研究では、話しことば、書きことばの両面から各国語の対照を行っているが、ここで発表するのは、書きことばに関する研究のうち文学作品（小説）を資料としたものの一部である。今回の資料は、下記のものである。

日本語：芥川龍之介『虱』原書房版 1964年

英語：Glenn W. Show 訳 “Lice” 原書房 1964年

中国語：呂元明訳『虱』人民文学出版社 1981年

インドネシア語：Drs. Hasan Amin 訳 “Kutu” PN Balai Pustaka
1976年

ポルトガル語：Satiko Nagashima 訳 “Piolhos” 私家版 1983年

資料のうち、ポルトガル語の翻訳は、今回特別に作成したもので、市販はされていない。文学作品を資料とする場合、常に翻訳が問題となる。誤訳の可能性はさておき、翻訳の際に、原語の構造が訳に影響をあたえることは考えられることである。この問題は、以下で各国語の記述の個所で触れられるこ

とになろう。

なお、ここで発表するのは、すべて筆者らと志部昭平、池田佳子との共同研究の結果であるが、執筆は、第Ⅰ節、第Ⅱ節を田中望、第Ⅲ節（英語）を上野田鶴子、第Ⅳ節（中国語）を菱沼透、第Ⅴ節（インドネシア語）を正保勇、第Ⅵ節（ポルトガル語）を日向茂男が担当した。（田中望）

Ⅱ．研究の枠組み

照応現象の研究は、現在のところ、英語について生成文法の枠組みのなかで行われているものが、もっとも進んでいるように思われる。そこで扱われているのは、主に一文内で照応が完結する、次の例のような照応である。

(3) Jim will go if he feels good.

(4) If he feels good, Jim will go.

この二つの例の“Jim”を一般に「先行詞」，“he”を「照応詞」とよぶが、この例のように、先行詞と照応詞が同一文内におさまる照応を「文内照応」とよぶ。文内照応に関する研究は、非常に数多く発表されている。これについては、Reinhart (1983), Wasow (1978), 日本語のそれについては、寺津ほか (1980), 寺津ほか (1981) などを参照されたい。

照応現象は、文内照応にのみ限るわけではない。

(5) きのも、銀座へ行った。そこで大学時代の友人に会った。その友人と会うのは、十五年ぶりだった。

ここでは、第一文の「銀座」と第二文の「そこ」、第二文の「大学時代の友人」と第三文の「その友人」の間に照応がみられる。このように、文の範囲を越えて照応現象が成立する場合を「談話内照応」と呼ぶ。現実の言語作品においては談話内照応が圧倒的に多いが、その研究は、まだほとんど進んでいないといってよい。

しかし、言語教育への応用という目的を考えれば、談話内照応を無視するわけにはいかない。そこで、われわれは、談話内照応を含めて、照応現象一

般について研究を進めることとした。

照応現象を明確に定義することは、現時点ではかなり困難であり、実際問題として資料にあたっていると、照応が成立しているかどうか、判断にまよった場合が少くない。そこで、ここでは、照応現象をなるべく広くとらえることを考え、次のような分類の枠組みを仮定した。

照応現象分類基準

1. 先行詞の条件

1-1 先行詞が「モノ」である場合

1-1-a 先行詞が特定 specific である場合

1-1-a-1 文脈の上での特定

(6) きのお友人に会った。彼は…………

この例では、第二文の「彼」の先行詞は、第一文の「友人」であるが、話し手は、第一文を発話した時点で特定の人間を頭に描いている。聞き手は、それがだれだかは、もちろん分からないが、話し手は、聞き手もある人間を特定したものとして第二文を発話する。「特定」であるとは、この意味である。

a-2 事実上の特定

(7) きのお母と電話で話した。彼女は…………

「母」は、常識的に言って、一人しかいない。同様に「月」なども一つしかないと考えられる。こういうものは、話し手が発話した時点で特定としてとらえられる。

a-3 固有名詞による特定

(8) きのお山田と会った。彼は…………

固有名詞は、原則として特定である。

1-1-b 先行詞が不特定 non-specific である場合

(9) 三億円強奪事件の犯人は、時効になったが、もし、その男に会ったら、ぜひ聞いてみたいことがある。

三億円事件の犯人は、まだ名乗り出ていないから、現時点では特定の人間ではない。この例のように、話し手が特定のものを想定していない場合を「不特定」という。特定であるか、不特定であるかは、言語形式だけでは、判断できない。

- (10) 彼女は、アメリカ人と結婚したがっている。

この例の「アメリカ人」は、特定のアメリカ人が想定されている場合（特定）と特定の人間はいないが、アメリカ人ならよいという場合（不特定）がある。

一般に、不特定の先行詞に対して照応関係が成立するのは、三億円事件の例のように、「仮想的世界」あるいは「仮定」の文脈のなかに先行詞と照応詞の両方が出現する場合に限るように思われる。

なお、先行詞が特定であっても、不特定であっても、ともに単数である場合と複数である場合がありうる。これを問題にするのは、日本語では、照応詞の単複がともに可能な場合があるからである。

- (11) まず、リンゴを三つ用意してください。そして、それ／それらを八つに切り分けてください。

この使い分けについては、文体的な理由が考えられるが、詳しい理由の解明は、今後の問題である。

また、先行詞が複数で、特定と不特定をともに含む場合が考えられる。

- (12) もし、三億円事件の犯人と当時の捜査責任者が会ったら、彼等はどんな話をするだろうか。

この場合も、先行詞と照応詞がともに仮定の世界のなかに入っていれば、照応関係が成立する。

- 1-1-c 照応詞の指示対象が文脈のなかに明示されておらず、推論の結果によって指定される場合

- (13) 次に、用意しておいたお酢、砂糖、塩、こしょうをまぜあわせ、それをサラダにかけます。

ここで、照応詞「それ」の先行詞は、酢、砂糖、塩、こしょうではなく、それらをまぜあわせたものである。そして、それ自体は、先行詞として出現していない。推論の結果、そうしたものがあはずだと考え、それを先行詞としているのである。

この種の推論がどの範囲で可能なかは、興味ある問題であるが、現時点では、説明できていない。次の例を見られたい。

- ? (14) 鉛筆を削って、それを集めて、燃やすと、……

この例の「それ」の先行詞は、常識的に言って、「削りかす」ととるのがふつうだろうが、誤解の可能性はほとんどないのに、この文は、成立しないように思われる。「削りかす」は、いわば「削る」という行為の副産物であるが、こうした副産物、あるいは産物の一部を先行詞とできるかどうか、その条件はなにかなどの問題は、今後に残されている。

1-1-d その他の特殊な指示対象を先行詞とする場合

- 1-1-d-1 先行詞が「それぞれ」あるいは「おのおの」の指示対象である場合

- (15) 表のA欄すべてに1、B欄すべてに2を記入してください。そして、それをC欄の数字とかけあわせてください。

この例の照応詞「それ」の先行詞は、「1」と「2」であるが、それは、複数あるA欄、B欄のおのおのに記入されているわけだから、第一文に指定されている「1」と「2」だけではなくて、A欄、B欄のすべての「1」と「2」をそれぞれC欄とかけあわせることになる。

- d-2 先行詞の指示対象が存在しないことが明らかな場合

- ? (16) A氏への返事の手紙は、まだ書いていなかった。しかし、

妻がどうしてもそれを見せろというので……

「それ」の先行詞「A氏への返事の手紙」は、まだ書いていないのだから、存在していない。この場合、「それ」によって照応関係を成立させることができるかどうか、不明である。

1-2 先行詞が「コト」である場合

1-2-a 動作、状態そのものを先行詞とする場合

- (17) きのうめずらしく祖母と食事をした。それは、十年ぶりのことだった。

1-2-b コトの起こる時間を先行詞とする場合

- (18) きのうめずらしく祖母と食事をした。そのとき、ふいに子供の頃のある日のことを思い出した。

1-2-c コトの起こる場所を先行詞とする場合

- (19) きのうめずらしく祖母とそとで食事をした。そこは、公園の近くのレストランで……

「そのとき」や「そこ」を照応詞とするのではなく、「その」「そ」を照応詞とすべきだという議論があるかもしれないが、ここでは、「そのとき」、「そこ」を全体として、照応詞と考えたい。これは、照応関係を同一指示 co-reference を基に定義したいためである。すなわち、「その」が「きのうめずらしく祖母と食事をした」というコトを指示すると考えるのではなく、「きのうめずらしく祖母と食事をした」というコトが、コトである以上、当然あるトキを含意していて、その指示しているトキと、「そのとき」が指示しているトキが同一であることが照応関係を成立させていると考えるわけである。

「そのとき」を分解しない理由の一つは、トキを指示する照応詞として、ほかに「そこ」などもあり、それらと統一的に扱うためには、分解せずに処理するほうが有利なためである。

- (20) きのうめずらしく祖母と食事をしていた。そこにたまたま
弟が入ってきた。

なお、コトを先行詞とする照応詞のなかに、接続詞と区別のつかないものが少なくない。

- (21) きょうはめずらしく祖母と食事をすることになった。そこ
で、昼間からなにかと落ち着かなかった。

この種の照応詞と接続詞との中間的なものは、外国語との対照研究の一つのポイントである。

2. 照応詞の条件

2-1 照応詞が名詞、あるいは名詞句として現れる場合

2-2-a 代名詞類

2-1-a-1 これ／それ／あれ

a-2 この／その／あの＋名詞（先行詞）の反復

- (22) きのう学校で一人の男に会った。その男は……

「この」「その」「あの」は、ここでは連体詞とはせず、その機能の面から便宜上、代名詞類に含めた。

a-3 この／その／あの＋先行詞の上位概念の名詞

- (23) きのう学校で一人の男子学生に会った。その男は……

a-4 この／その／あの＋先行詞に含意される概念を表す名詞

- (24) きのう学校で一人の男に会った。その子供がわたしの教え子で……

この種の照応詞を、「(その男)の子供」と解釈して、「代行指示」とする考え方がある。林四郎(1972)を参照のこと。a-3と統一的に解釈して、関係概念を指示すると考えるのがよいから、「代行指示」とするのが妥当かは、今後の問題である。

上位概念、関係概念とともに同一概念を表す名詞を照応詞と

する場合がありますが、ここでは省略する。

2-1-b 照応詞が名詞、あるいは名詞句のまま、修飾句なしで現れる場合

b-1 同一名詞、名詞句の反復（固有名詞を含む）

(25) きのう学校で一人の男に会った。男は……

さきにあげた照応の定義，すなわち「先行文脈のなかのある言語形式を他の言語形式によって代用する」という定義からいえば，厳密には，同一名詞を反復するこの種の場合（1-b 全体についても同様）は，照応のなかに入らない。しかし，「同一指示」の面からいえば，同一名詞の反復も当然，関係がでてくる。実際，(25) の例で，照応詞として，「男」を使うか，「その男」を使うかの使用条件を明らかにすることは，照応現象全体の解明にとって，一つの重要なポイントである。

b-2 先行詞が含意する概念を表す名詞，あるいは先行詞の部分概念を表す名詞を照応詞とする場合

(26) きのう山田さんが新車を買った。エンジンは4気筒だが……
……

b-2 を照応現象のなかに含めることについては，(26) の「エンジン」の解釈が先行する文脈の「新車」によって，どの車のエンジンであるかが特定されなければ，成立しないことによって明らかであろう。しかし，こうした解釈が成立するためには，先行詞の表す概念と照応詞の表す概念との間に，いわゆる「百科事典」的知識を仮定しなければならない。

b-3 先行詞の指示対象を表す他の名詞を照応詞とする場合

(27) 公園のかどに警官が立っていた。ポリ公のそばには，一匹の犬がいて……

この種の照応現象には，いわゆる epithet 表現や比喩表現が関

係してくる。

2-1-c 照応詞が「修飾句+先行詞と同一の名詞」の形になっている場合

- (28) 公園のかどに警官が立っていた。ただ一人、ひっそりと立っている警官のそばには、一匹の犬が……

このケースは、原理上は、先にあげた 2-1-b-1 の「同一名詞の反復」と同じである。照応詞に修飾句が付くのは、談話構造上、あるいは表現上の理由で、照応現象とは直接の関係はないと考えられる。しかし、他の照応詞の形式との比較の上からは、一つのタイプとして分類しておいたほうがよいと思われる。

修飾句は、ほかのいろいろな照応詞の形式にも付きうる。たとえば、(28) の照応詞は、「ただ一人、ひっそりと立っているかれ」でもよいし、「ただ一人、ひっそりと立っているその男」でもよい。ただし、次の二つの照応詞の形式の区別は重要である。

- (29) 公園のかどに警官が立っていた。ただ一人、ひっそりと立っているその警官のそばには、一匹の犬が……
- (30) 公園のかどに警官が立っていた。そのただ一人、ひっそりと立っている警官のそばには、一匹の犬が……

2-1-d 照応関係を保証する特殊な言語形式を照応詞として用いる場合

ここでは、照応詞の例をあげるだけにとどめる。

「かの～」、「おなじ～」、「当～」、「～の」、その他。

d-1 時間を表す照応詞を用いる場合

例：「この／その／あの＋とき／時分／頃」、「そのうちに」

「そのまに」、「当時」など。

d-2 場所を表す照応詞を用いる場合

例：「ここ／そこ／あそこ」、「同地」など。

2—2 照応詞が、先行詞の指示対象を指示するのではなく、先行詞の指示対象の属する類を指示する場合

- (31) 山田さんがポップアートの奇妙な絵を買ったそうだが、わたしは、そういう絵は好まない。

この種の照応関係を構成する照応詞の例としては、ほかに「こんな／そんな／あんな」、「この／その／あの＋ような」などがある。

2—3 照応詞が、現実には文脈に現れていないが、想定される場合

- (32) 山田さんがポップアートの奇妙な絵を買った。見せてもらったが、わたしには、さっぱり良さがわからなかった。

一般に、この種のケースを「ゼロ照応」と呼んでいる。

これを照応関係として認めるかどうかは、問題がないわけではない。とくに、ゼロ照応詞を想定すべき場合と、そうでない場合の区別が微妙であり、いわゆる「省略」との関係も、はっきりしない。しかし、ここでは、他の照応詞の形式との用法の異同を明らかにするために必要であると考えて、ゼロ照応を一つの類として認めることにした。

3. 先行詞と照応詞の位置関係

3—1 前方照応 anaphora

- (33) 山田さんは、最近、新しい車を買った。彼の意見によれば、……

先行詞が照応詞に文脈上、先行する場合を「前方照応」という。照応現象のなかでもっともふつうのものである。

3—2 後方照応 cataphora

- (34) 彼の心情はよくわかるとはいえ、山田さんがやったことは、とても認容せられるものではなかった。

先行詞が照応詞に文脈上、後行する場合を「後方照応」という。

後方照応についても「先行詞」という用語を使うのは、表現上は矛盾であるが、ここでは、術語として、統一的に「先行詞」を使う。

談話内照応に後方照応がありうるかどうかは、問題のあるところである。次のような例を照応として認めるか否かについては、田中（1982）を参照されたい。

- (35) 山田さんは、こんなことを言っていた。先日、買った絵は、どうも贋作らしい。…………

文内の後方照応についても、日本語でどのていど一般的であるかは、今後、調査の必要な項目であろう。また、歴史的にいつごろから出現するのも、興味のある問題である。

3-3 先行詞と照応詞との文脈内での距離関係

ここでは、用例はあげないが、問題点だけを指摘する。

先行詞と照応詞の間隔を測る際の測定基準を何にとるかが問題である。基準としては、文数、文節数なども考えられるが、実際の解釈の過程を考えると、命題数、指示対象の候補の数などをとるのがよいように思われる。指示対象の候補とは、

- (36) 山田さんが新しい絵を買ったことは、きのう公園の近くの喫茶店で石井さんといっしょに紅茶を飲んでいたときに聞いた。フランス製の18世紀に作られた額に入れて、応接室の壁に掛けてあるそうだ。奥さんがそれを見て、なにが書いてあるのかわからないし、気持が悪いから、画商に返すように山田さんに言ったそうだ。

この例では、「公園」、「喫茶店」、「石井さん」、「紅茶」、「額」、「応接室」、「壁」、「奥さん」を指す。これらは、すべて、その指示対象が以降の文脈のなかで照応詞の指示対象として再現する可能性を持っている。それゆえ、この例では、指示対象の候補数は、8である。ただし、照応詞として、「それ」が使用さ

れていることから、「石井さん」、「奥さん」を除いて、6とするのがよいか、また、第2文にゼロ照応詞が存在し、「それ」は、そのゼロ照応詞に照応すると考えて、介在する指示対象の候補は、「額」、「応接室」、「壁」の三つとするのがよいかなどは、今後、研究が必要な点である。

4. 先行詞の出現環境

先行詞の出現する各種の環境いかんが、照応詞の形式の選択に影響を与える可能性がある。その環境として、どのようなものがあるかを解明することが今後の課題である。

現在のところでは、次のような環境が影響を与える可能性があると考えられる。

4-1 先行詞が出現する文の文法的環境

- 4-1-a 先行詞が文の一次成分として出現するか、二次成分として出現するか。

文の一次成分、二次成分については、国語研（1963）を参照のこと。

- 4-1-b 先行詞が文の母型文 *matrix sentence* に出現するか、埋め込み文 *embedded sentence* に出現するか。

4-2 先行詞が出現する部分の情報構造的環境

- 4-2-a 先行詞が出現文 *presentational sentence* に出現するか、そうでないか。

- (37) 公園のかどに一人の男がいた。その男は、くたびれたコートを着て、犬をつれていた。

例 (37) の先行詞「一人の男」は、出現文に現れている。一般に、「いる」、「ある」、「来る」、「現れる」などの出現動詞を用いた文のうち、主として「～に～+が出現動詞」の形の文型を出現文という。出現文は、ふつう談話のなかに新しい主題を導

入する際に用いられる。その意味では、出現文は、談話構造に重要な関係を持つ。

4—2—b 先行詞がメタ言語的表現に出現するか、そうでないか。

(38) 山田さんのことをこんなふうに言うのは、誤解を与えるかもしれないが、彼の最近の行動は、……

例 (38) の従属文のような表現を「メタ言語的表現」と呼ぶことにする。談話は、一般に、主題を展開していく部分と、その展開のしかたについて補足的に説明していく部分から成っているのがふつうである。この補足的に説明する部分を「メタ表現」とすれば（主題を展開する部分を「地表現」と呼んでもよい）、ここで問題にしたいのは、「メタ表現」であるか、ないかであるということになる。「メタ言語的表現」は、「メタ表現」のうちの一部分である。

「メタ表現」は、次に述べる談話の「前景的部分」と「背景的部分」と関係が深い。メタ表現であるかないかは、談話を前景と背景に分けるときの一つの基準となる。

4—2—c 先行詞が談話の前景的 foregrounded 部分に出現するか、背景的 backgrounded 部分に出現するか。

これについては、第IV節の中国語との対照研究のなかでふれているので、そこを参照されたい。

「メタ表現」「地表現」と「前景的部分」「背景的部分」の区別は、前者が言語形式を手掛りに判定されるのに対して、後者は主として表現内容から判定される点にある。分析の際には、前者は、後者の判定の一手段でもあり、実際には、かなりの部分が重なることと思われる。

4—2—d 先行詞が仮定的表現のなかに出現するか、そうでないか。

(39) 山田さんは、このところ新しい絵を探しているらしい。

奥さんの話によれば、書斎の南側の壁にその絵を掛けるつ

もりだという。

例 (39) は、談話全体が仮定的世界の話である。先に 1—1—b でふれたように、先行詞と照応詞の双方が仮定的世界のなかにあれば、「その～」、「それ」などによる照応関係が成立する。この例からもわかるように、「仮定的表現」は、「仮定文」と同一ではない。

4—2—e 先行詞が共有知識として提出されているか、非共有知識として提出されているか。

(40) A この前、いっしょに見た映画、覚えてるかい。

B ああ。

A あの監督がまた新しいのを撮ったんだそうだが、……
…

(41) A この前、ある映画を見たんだが、その監督がまた新しいのを撮ったらしいんだ。いっしょに見に行かないか。

B ああ、時間があればね。

(40) は、共有知識として提出されている例、(41) は、非共有知識として提出されている例である。この二つの例は、共有知識であるかないかが明確に示されているが、実際には、判断のむずかしい場合が少なくない。

ここに示した照応現象の分類の枠組みは、研究の初期の段階で仮説として提案したものである。その後の研究は、この仮説を検証したり、改訂したりしながら、進んで来た。Ⅲ節以降の『虱』とその各国語訳との対照研究はその過程の一部の報告である。

この分類の特徴は、なるべく照応現象を広くとらえようとした点、および談話内照応を中心に照応現象をとらえている点にあらう。その結果、4—2 に特徴的に現れているように、研究の前提として、まず談話構造の分析方法

を開発しなければならなかった。また、1—1 で取り上げた「指示」の分類（「特定」「不特定」）なども、照応現象を研究する際には、どうしても解決しておかなければならない問題である。指示については、日本語には、それを表す特定の言語形式がないが、本研究の対照の対象である英語、インドネシア語、ポルトガル語などには、冠詞が存在する。第Ⅲ節以降の各国語との対照研究では、冠詞とそれに対応する日本語の言語形式との対照が一つの重要な項目となる。

最後に、照応現象の定義についてふれておきたい。Ⅰ節のはじめで、照応現象とは、先行する文脈のある要素を、後続する文のなかで代用形をもって表す現象とした。しかし、この節の分類からもわかるように、照応詞が代用形である場合のみを照応と考えるのは、定義として狭すぎるように思われる。ここでは、2—1 の b—1 のような同一名詞の反復のケースも照応現象のなかに含めるために、同一指示の概念を利用して、次のような定義を採用したい。すなわち、照応現象とは、先行する文脈のなかのある言語形式と後続する文脈のなかのある言語形式とが同じ対象を指示している場合に認められる現象である。

このように定義しても、2—1 の b—2 の先行詞の指示対象の関係概念を表す名詞を照応詞とるケースが含まれないとも考えられる。その場合には、照応詞を解釈する際に先行詞の指示対象を考慮に入れる、という解釈上の理由を定義のなかに含めなければならない。先の定義でも、「指示対象」の概念を広くとれば、処理できる問題なので、どちらの定義を採用するかは、さして、問題ではないように思われる。

（田中望）

Ⅲ．照応関係を示す「この/その＋名詞」とそれに対応する英語の表現

1. はじめに

コ・ソ・アの体系に基づく指示詞「これ／それ／あれ」や、名詞を修飾す

る「この／その／あの」には、大別して、眼前の指示対象をもつ現場指示と、先行あるいは後続の文脈に指示対象をもつ文脈指示の用法がある。(林1972, 堀口1978, 田中1981, および正保1981参照)。ここでは、『虱』を参照し、名詞（いわゆる形式名詞を除く）を修飾する「この／その／あの」の用法を、対応する英語の表現と比較対照しながら、いくつかの問題点を明らかにすることを試みる。用例には出現の位置を（章：行）の形で示した。

2. 「この／その／（あの）+名詞」の具体例

『虱』には「この／その／あの」によって修飾される名詞句は18例あるが、「あの」を用いた例はない。また、「この／その」が「これの／そのの」と同義に用いられる、例えば（1）に二重下線で示すような用法は2例あるが、これは本稿の対象から除く。これは、英語における対応表現が示すように、英語では所有格を示す“of”が用いられ、前置詞句を構成する名詞には、実質名詞が用いられる用法である。これを代行指示（林, 1972）と呼んでいる。ここでは、二重下線部が先行文脈の点線部に言及し、日本語では「その」の「そ」が点線部を、英語では“of”を除いた“the things”が点線部を代行していると考えられる。

（1） それから又、胴の間には、沢庵漬を鯖桶へつめたのが、足のふみ所もない位、ならべてある。慣れない内は、その臭気を嗅ぐと、誰でもすぐに、吐き気を催した。（1：11—14）

More over, in the waist of each vessel stood so mang loach tubs full of pickled radishes that there was almost no place left to step. Until they got used to it, the evil odor of the things filled every man who breathed it with a sudden nausea.

「この／その」が明らかに現場指示に用いられている例は3例あり、（2）のように会話文の中に用いられているものである。

(2) 「これ、この船中に、一人として虱の恩を蒙らぬ者がござるか。
その虱をとって食うなどとは恩を仇でかえすも同然じゃ。」(3: 39—40)
“Look here! Is there anybody in this ship who isn't indebted to
lice? Takin' these lice an' eatin' 'em is just like payin' kindness
with hate!”

残る13例は、一応、文脈指示に用いられる場合であり、「この」が8例、
「その」が5例である。以下にその例を示す。下線部は照応詞を、点線部は
先行詞を表わしている。

(3) から (7) に示す例は「その＋名詞」を用いているものである。そ
れぞれの「その＋名詞」に対応する英語を対比させ (8) に並べてみると、
「その」に対応する英語には、定冠詞 “the” が用いられる場合もあり、指
示詞である “that” あるいは “these” を用いる場合もあり、それ以外の語
(例文5) を用いる場合もあることがわかる。

(3) 小頭は、佃久太夫、山岸三十郎の二人で、佃組の船には白幟、山
岸組の船には赤幟が立っている。五百石積の金毘羅船が、皆それぞれ、
紅白の幟を風にひるがえして、川口へ乗り出した時の景色は、如何にも
勇ましいものだったそうである。

しかし、その船に乗組んでいる連中は、中々勇ましがっている所の騒
ぎではない。(1: 4—9)

There were two sub-commanders, Tsukuda Kyudayu and Yama-
gishi Sanjurō, and white standards were set up in Tsukuda's boat
and red in Yamagishi's. History records that it was a most brave
scene as their Kōpira vessels, each 500 *koku* burden, left the
estuary for the deep, all with their red and white banners flapping
in the wind.

But the men in the boats did not feel at all gallant.

(4) 所が佃組の船に、妙な男がいた。(中略)

それから、その船の中では、森の真似をして、虱を飼う連中が出来てきた。(2:1-3:2)

But there was one odd fellow on the Tsukuda boat. ...

After that there came to be a group in that boat that followed the example of Mori and kept lice.

(5) この連中も、暇さえあれば、茶呑茶碗を持って虱を追いかけている事は、外の仲間と別に変わりがない。唯、ちがうのは、そのとった虱を、一一刻銘に懐に入れて、大事に飼って置くだけである。(3:2-5)

In the matter of going about in pursuit of lice whenever they had leisure, this group was not different from the rest of the perty. The only difference was that all they caught, they put one by one faithfully into their bosoms and carefully kept.

(6) それのみならず、孝経にも、身体髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なりとある。自、好んでその身体を、虱如きに食わせるのは、不孝も亦甚しい。(3:21-23)

More over, in the book of Filial Piety, it is written that we receive our bodies, hair and hide, from our fathers and mothers, and the very beginning of filial duty lies in not injuring them. Of one's own choice to feed these bodies to such things as lice was egregiously unfilial.

(7) 「これ、この船中に、一人として虱の恩を蒙らぬものがござるか。その虱をとって食うなどとは、恩を仇でかえすも同然じゃ。」(3:39-40)
“Look here! Is there anybody in this ship who isn't indebted to lice? Takin' these lice an' eatin' 'em is just like payin' kindness”

with hate!”

(8) 「その＋名詞」とそれに対応する英語の表現

- | | | |
|--------|--------|-----------------|
| 例文 (3) | その船 | the boats |
| (4) | その船 | that boat |
| (5) | その取った虱 | all they caught |
| (6) | その身体 | these bodies |
| (7) | その虱 | these lice |

次に、「この＋名詞」8例を、対応する英語と比較する。8例の内6例が“this＋名詞”であり、残る2例「この男」と「この連中」には、それぞれ代名詞の“he”と“them”が用いられている。以下(9)から(11)にその代表的例文を示す。

(9) 所が佃組の船に、妙な男が一人いた。これは森権之進と云う中老のつむじ曲りで、身分は七十俵五人扶持の御徒人である。この男だけは不思議に、虱をとらない。(中略)

では、この男だけ、虱にくわれないかと云うと、又そうでもない。

(2:1—2:8)

But there was one odd fellow on the Tsukuda boat. He was an eccentric middle-aged man named Mori Gonnoshin, an officer of foot with an allowance of seventy bales of rice and rations for five men. Strangely, this man alone did not catch lice. ...

Then if you think this man alone was not bitten by the lice, still you are mistaken.

(10) 同役は、冗談と思ったから、二三人の仲間と一しょに半日がかりで、虱を生きたまま、茶呑茶碗へ二三杯とりためた。この男の腹では、

こうしておいて「さあ飼え」と云ったら、いくら依怙地な森でも、閉口するだろうと思ったからである。

すると、こっちからはまだ何も云わない内に、森が自分の方から声をかけた。(2: 21—26)

The officer, because he thought it a joke, worked half a day with two or three others and collected several cupfuls of living lice. He thought in his heart that if he handed them over thus and said, “Well, raise ’em,” even Mori, despite his contrariness, would be stamped.

Then, before he had time to utter a word, Mori spoke up and said, “...”

(11) 井上のように、虱を食う人間は、外に一人もいないが、井上の反対説に加担するものは可成いる。この連中の云い分によると、虱がいたからといって、人間の体は決して温るものではない。(3: 18—20)

There was not another soul who took after Inoue and ate lice, but a considerable number joined him in his opposition. According to them, men’s bodies certainly could not be warmed by the presence of lice.

例文(9)と(11)に用いられている「この＋名詞」は、双方共、先行文脈に、(9)では「...佃の船に、妙な男が一人いた。」、(11)では「井上のように、虱を食う人間は、外に一人もいないが、井上の反対説に加担するものは可成いる。」という存在文を有し、これらの存在文を構成している名詞句「妙な男」と「井上の反対説に加担するもの」がそれぞれ(9)の「この男」および(11)の「この連中」の先行詞となっている。

例文(10)の「この男」は先行文脈の「同役」を先行詞としている。例文(10)は例文(9)で始まる『虱』第二節の中途に述べられている部分であ

る。第二章では、15行に至るまで、冒頭に出現した「妙な男」を先行詞とする「この男」を照応詞として話が展開する。しかし、15行至って「...同役の一人が、呆れた顔をしてこう尋ねた。」と述べ、ここで、「同役の一人」が新しい人物として話の筋に登場することになる。以後、照応詞「この男」は、それまでの先行詞である「妙な男」すなわち森権之進を指示対象とする照応詞として用いられることがなくなり、替って「森」が繰返し使われることになる。一方、新しく登場した「同役の一人」“one of his fellow”(2:16)は、後続の文においては、例文(10)にみるように、「同役」“the officer”(2:21)によって言及され、更に、「この男の腹では...」“he thought in his heart...”(2:22)と続き、「この男」“he”が、先行詞である「同役」の照応詞に用いられている。以上に述べた、第二章前半における先行詞と照応詞の流れを順に示せば(12)のようになる。

(12) 「妙な男」を x で、「同役の一人」を y で示す。

先行詞 x	妙な男 (2:1)	one odd fellow
照応詞 x	これ [= 森権之進] (2:1)	he
照応詞 x	この男 (2:2—3)	this man
照応詞 x	この男 (2:7)	this man
先行詞 y	同役の一人 (2:16)	one of his officer
照応詞 x	森 (2:19)	Mori
照応詞 y	同役 (2:21)	the officer
照応詞 y	この男 (2:22)	he
照応詞 x	森 (2:24)	Mori
照応詞 y	こっち (2:25)	he

「この十名詞」は、『虱』においては、先行文脈に存在文をもち、その存在文の構成要素である名詞句を先行詞とする傾向が顕著であった。また、(12)に示した先行詞と照応詞の流れから明らかなように、作者が事柄を述べていく過程において、「妙な男」の存在する場面に視点を据えている場合

には「この男」が「妙な男」の照応詞として用いられたが、一旦、作者が視点を「同役の一人」の存在する場面に置き替えて事を述べ始めると、「この男」は「同役」の照応詞となる。このことは、例文(10)の最後の文である「こっちからはまだ何も云わない内に…」(2:25)という表現の中に「こっち」という方向性を意味する語形式が用いられていることから強化されている。即ち、「この＋名詞」が照応詞として用いられる場合には、ある具体的場面が文脈の中に想定され、この場面に存在する事物を表わす先行詞に対して、あたかも作者(話し手)がその場面に立って事物を指示しているかのように「この＋名詞」を照応詞として用いているものと見なすことができる。これは、現場指示(例文(2))に近い用法と言えよう。一方、「その名詞」にはこのような特性がないように思われる。

3. 「この／その＋名詞」の先行詞

文脈指示に用いられる「この／その＋名詞」の先行詞は、先行詞が顕在する場合とそうでない場合がある。

先行詞が顕在する場合は、例文(3),(4)に「その＋名詞」の例があり、例文(9),(10),(11)には「この＋名詞」の例がある。いずれも前方照応であり、「この／その」によって修飾される名詞は、(13)において比較するように、先行詞をより一般的意味特性で示したものと言えよう。これは英語の場合も同様である。

(13) 先行詞⇒照応詞

例文(3) 五百石積みの金毘羅船 ⇒その船

例文(4) 佃組の船 ⇒その船

例文(9) 妙な男 ⇒この男

例文(10) 同役 ⇒この男

例文(11) 井上の反対に加担するもの⇒この連中

一方、例文（５）、（６）および（７）の場合には（１４）に示すように先行詞そのものが先行文脈（点線部）にあると言えないものである。

（１４） 先行文脈⇒照応詞

例文（５） この連中も…茶碗を持って虱を追いかけている

⇒そのとった虱

例文（６） 孝経にも、身体髪膚之を父母に受く…とある⇒その身体

例文（７） この船の中に、一人として虱の恩を蒙らぬものがござるか。

⇒その虱（即ち、みんなが恩を蒙っている虱）

（５）の先行文脈からは、「この連中も虱を取っている」、（６）の文脈からは「身体は父母より受けるものである」、（７）においては、「一人として虱の恩を蒙らないものはない。虱には誰もが恩を蒙っている」という読みが可能であり、その解釈を先行詞として捉え、（５）の「そのとった虱」、即ち、追いかけて取った虱、（６）の「その身体」、即ち、父母より受ける身体、（７）の「その虱」、すなわち、みんなが恩を蒙っている虱という意味での用法が成立しているものと考えられる。

４．「この／その」に対応する英語の照応詞

日本語の指示詞には、コ・ソ・ア系の３種があり、名詞を修飾する場合には「コノ・ソノ・アノ」の語形式が用いられる。

英語の指示詞は、単数・複数の別はあるが、“this: these/that: those”の二種であり、代名詞として用いる場合にも、名詞を修飾する場合にも同一の語形式を用いる。指示詞の他に、英語の照応関係を示す語には冠詞“the”と性、数、格によって変化する人称代名詞“he, she, it: they”がある。いずれの語形式を用いた場合にも、これらの照応詞により、特定の同定可能な（specific and identifiable）指示対象が先行詞として文脈に存在することを意味する。

中でも、冠詞 “the” は上述の意味特性のみが附与されている 語形式である。一方、“this: these/that: those” は、指示対象の単複により 選択的であり、ダイクシス用法の基本的特性としての遠近性 (proximity) をもつ。照応関係を示す場合にも、“this: these” には近性 (proximal) が特徴的であり、非近性 (non-proximal) を示す場合には “that: those” が用いられる。また、代名詞 “he, she, it: they” の場合には、指示対象の性・数・格の別による選択性はあるが、遠近性に関しては中立である。(Halliday and Hasan 1976, Lyons 1977参照)

『虱』に用いられた「その+名詞」に対応する英語の照応詞は上記 (8) に並べてある。例文 (3), (4) が示すように、「その」には “the” あるいは “that” が対応している。しかし (6) および (7) の「その」には “these” が対応している。“these” は “this” の複数形であり、近性 (proximal) を特性とする照応詞である。日本語の場合には「この」が近性を示すと考えれば、(6) と (7) において「この」を用いてもよさそうに思われるが、(6) と (7) の「その」は「この」で表現することは出来ない。この理由としては、(6) と (7) における「その」が指示する対象が、先行文脈に示された、抽象化された概念を表わす名詞句であるのではないかと考える。即ち、(6) の「その身体」は「孝経にも書かれている、(誰もが) 父母より授る身体」を指し、(7) の「その虱」とは「一人として恩を蒙らぬものがないという虱」であり、どちらも具体的な「身体」あるいは「虱」を対象としている訳ではないのである。一方、ここで英語の “these” が対応表現とに使われていることは、英語の “these” が、単に、先行文脈で述べたところの「身体」あるいは「虱」という指示対象のあり方を意味するものと考えられる。この点で「その」は “that: those” に必らずしも対応するものでないことが明らかである。

「この+名詞」に対応する英語の照応詞には、上記 (12) に示した例にもあるように、“this~” あるいは代名詞 “he” 等を用いている。既に述べたように、「この+名詞」が用いられる場合には、先行文脈に 存在文を用い、

場面を設定し、その場面に存在すると想定される指示対象に対して用いるという傾向が『虱』では顕著であったが、英語の場合には、遠近性(proximity)には無関係である代名詞が照応詞として用いられる点も対照すべき点であろうと思われる。

以上、『虱』を参照し、「この／その＋名詞」の用法を英語の対応表現に対照させ、いくつかの問題を考察した。しかし、これは極めて限られた用例を参照したものであり、今後、更に範囲を広げ、問題の検討を重ねる必要があると思われる。

(上野田 鶴子)

Ⅳ. 「その」の機能と対応する中国語の表現

1. はじめに

ここでは、照応用法の「その」を取り上げ、中国語の対応する表現との比較を試みる。

「コソア」に対応する中国語は、指示詞または代名詞の「这 zhè」(近称)、「那 nà」(遠称)の二つの系統の語である。「这」の系統には「这么」「这样」などがあり、「那」の系統には「那么」「那样」などがある。

その＋名詞 (例：その人、その本)

に対応する中国語は、一般的には、次のような形に対応する。

那 (または、这) ＋数詞＋量詞(助数詞)＋名詞 (例：那个人、または、这个人；那本書、または、这本书)

数詞(特に一)と量詞は省かれる場合もある。

『虱』には合わせて7例の「その」が出現する(ただし、「その」に修飾される名詞が形式名詞に類するものは除く)。これら7例は、いずれも照応用法の「その」である。これらの「その」について、対応する中国語の表現が、「这」「那」などの指示詞になるか、あるいは他の言語形式になるか、それは「その」および「这」「那」の機能とどう関係するか、といった問題を

中心に考察を行う。「その」が「这」の系統の語に対応するか、「那」の系統の語に対応するかという点については、副次的に扱う。また、「その」と「这」「那」の機能を比較するために、照応用法の「这」「那」に対応する日本語の表現がどういう形をとるか、についても問題にする。用例は、『虱』以外の文学作品からも適宜とりあげた。

『虱』に現われた「その」7例のうち、対応する中国語の表現が指示詞を用いるのは、次の1例のみである。

その臭気（1章：11行）

那股子臭味儿（「股子」は量詞）

5例は、「その＋名詞」に対し、中国語では「その」に対応する語を欠き、裸の名詞だけが対応する。1例は、「その＋名詞」に対し、「代名詞＋的（の）＋名詞」が対応する。

これら『虱』における対応例から、照応用法においては、「その」が単純に「这」「那」とは対応しないこと、「その」と「这」「那」の機能には相当程度の差異があることが予測される。

2. 文内照応（1）——省略可能な「その」

『虱』（原文）には、文内照応の「その」は出現しない。照応用法の7例は、いずれも談話内照応である。これに対し、中国語訳には、次のような「那」が出現する。これらはいずれも一文内において機能する「那」である。

（1）その上、船の中には虱が沢山いた。それも、着物の縫目にかくれているなどという、生やさしい虱ではない。（2：18—19）

还有，船上虱子很多。它們不是那种藏在衣縫里比較容易对付的虱子。

（2）船中にも森の虱論に反対する Pharisien が大勢いた。（3：7—8）

就是在这艘船上，反对森那套关于虱子的理论的保守分子，也是很多的。

（1）の「那（种）」、および「藏在衣縫里比較容易对付（的）」は、ともに

「虱子」を修飾する（「種」は量詞）。

（2）の「那（套）」、および「关于虱子（的）」は、ともに「理论」を修飾する（「套」は量詞）。

したがって、（1）から、「那种虱子」と「藏在衣縫里比較容易对付的虱子」とを取り出し、両者は指示対象が同一であり、照応の関係にある、同様に（2）においては、「那套理论」と「关于虱子的理论」とが照応の関係にある——こう考えることも一つの説明になりうるかもしれない。

しかし、このようなに、本来一つの名詞を、先行詞（「藏在…的虱子」と「关于虱子的理论」）の一部と、照応詞（「那种虱子」と「那套理论」）の一部とに分解する解釈には、無理がある。本来一つのものを二つに分け、互いに関係ありとする考え方は、照応関係においては無用であろう。

したがって、（1）（2）の「那」に関して照応関係を認めるとすれば、（1）については「那」と「藏在衣縫里比較容易对付」、（2）については「那」と「关于虱子」との間においてである。しかし、3で改めて述べるが、指示詞の「那」（および「这」）には、句や節を参照するよう求める機能はない。

「这」「那」が指示できるのは、名詞のみである。

つまり、（1）（2）には照応関係が存在せず、（1）（2）の「那」の指示の機能はゼロである。

このような指示機能ゼロの「那」は、香坂（1971）によれば、名詞修飾構造の要求によって生起する。すなわち、被修飾名詞の修飾要素が長い場合、その修飾要素を安定させる必要上、「那」が求められる。

この種の「那」は、文法上は省略も可能である。「森の虱論」は、別の箇所では次のように訳されている。

（3）同役の二三人は、森の虱論を聞いて、感心したように、こう言った。（2：56—57）

那兩三个伙伴听了森叔之进的关于虱子的理论，大為欽佩地說。

この種の「那」は、修飾要素と名詞の間に置かれることもある。また、すべての名詞修飾構造に使えるとは限らない。この種の「那」については問題にすべき点はまだ残されているが、今は触れない。「那」には名詞修飾構造の要求によって出現する、指示機能ゼロの「那」があることを指摘するにとどめる。

指示機能ゼロの「那」は、現代中国語に多く出現する。照応現象を問題にする場合、これらの「那」を除外して考える必要がある。これらの「那」は、「その」とは対応しない。

「その」にも、指示機能ゼロの「那」と同じように、一文内で機能し、また、名詞修飾構造に関して使われる例が存在する。

(4) 君がわざわざやって来たその理由を話してくれ。

你講講特意来这儿的理由。

この「その」は、省略することが可能な点も、上述の「那」に類似している。ただし、このような「その」は、文中に存在する以上、「君がわざわざやって来た」という修飾節の内容を、聞き手に意識(想起)させる。つまり、前方の情報内容を参照するよう聞き手に求める機能がある。上述の「那」が名詞の出現を予告するだけで、指示の機能をもたないことと比べて、大きな違いがある。この点に注目し、Ⅳ節では、このような「その」は、それ自体照応詞と考えることにする。したがって、先行詞は「君がわざわざやって来た」という修飾節である(以下、照応詞は下線＝、先行詞は下線一で示す)。

(4)の「その」を照応詞とすることには、いくつかの異論がありうるであろう。同一指示的という観点からは、「その理由」を照応詞、「君がわざわざやって来た理由」を先行詞とすることも考えられる(このような考え方をとらない理由については先述した)。Ⅱ節の枠組みに従えば、「君がわざわざやって来た」というコトの中に、「理由」という概念が含意されていると考え、その「理由」を先行詞とすることになる。林四郎(1977)に従えば、「その」

の「そ」が、「君がわざわざやって来た」の代用形である、と考えることもできよう。

ここでは、「その」が文中の情報を聞き手に参照させる機能に注目し、その点のみから、このような「その」を照応詞と考える。この種の「その」は、指示の機能のみを有し、情報内容の代用となる機能はもたない。

(4)の中国語訳には、どうしても「那」を加えることができないという。名詞修飾構造に「那」を加えることのできない例であるが、その理由は明らかでない。

(1)(2)(3)において、指示機能ゼロの「那」と指示機能のみをもつ「その」とは、対応していない。これは両者の機能の違いに基づくもので、当然のこととも言える。しかしながら、機能の異なるこの両者が、形の上では対応する場合もありうるので、注意を要する。

(5)身体を半分起してそれを受取った先生は、起きるとも寐るとも片付かないその姿勢のままで、変な事を私に聞いた。(『ころ』)

先生把身体欠起一半接了帽子以後，保持着那么一个既不象起来，又不象躺下的姿态，問了我一句可怪的話。

(6)先生はあきれたと言った風に、私の顔を見た。巻烟草を持っていたその手が少し顫えた。(『ころ』)

先生吓呆了似地看着我的臉。拿着烟卷的那只手有些顫抖。

(5)の「那么」、(6)の「那」は、(1)(2)の「那」同様、名詞修飾構造を安定させるために使われており、指示の機能はない。(6)の「那」が、被修飾名詞と修飾節の間に位置しているのは、名詞「手」が一音節であるため、「那只手」として、修飾節とのバランスを保つ必要があるためと考えられる。

一方、「その」は(3)と同じく指示の機能のみをもつ照応詞である。したがって、このような「那」と「その」の対応は形の上だけのものであるが、

ともに名詞修飾構造に関して生起するという共通点がある以上、対応の生ずる可能性は存在するわけである。

3. 文内照応(2)——省略不可能な「その」

文内照応の「その」が、省略不可能な例も存在する。この場合は、「その」は、代用の機能ももつ。

(7) 古垣の新聞はかなり怪しげなものではあったが、政界財界の上層部に無料で配布されているという、その宣伝力は警戒しなくてはならなかった。(『金環蝕』)

古垣的那張報紙很叫人頭痛，他把報紙免費贈送給政界和財界的上層人物，它的宣傳力量是不可低估的。

(8) 自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう。(『こころ』)

我們這批人誕生在充滿了‘自由’‘獨立’‘自我’的現代，恐怕誰都要成為它的犧牲，不得不嘗嘗這種寂寞的味道吧。

これらの「その」は、(7)では、「政界財界の上層部に無料で配布されている」というコトを指示し、かつ「その」自体が先行詞の代用として機能している。すなわち、「その」と先行詞のあらわすコトとは同一指示的である。(8)も同様に、「その」が照応詞、「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた」というコトが先行詞である。

中国語では、いずれも代名詞「它(「それ」に相当する)」が照応詞であり、直接には文脈前方の(「その」が指示するコトの中の)中核となる名詞(モノ)を指示する。すなわち、「它」は、(8)では「報紙」と、(9)では「現代」と、同一指示的である。ただし、そのモノは、コトによって条件付けられているから、照応関係の総体としては、日本語と中国語は過不足なく対応する。

このような「その」に、「这」が対応する場合もある。上述の「它」が、「这+量詞+名詞」に置き代えうる場合で、「这+量詞+名詞」が文脈前方の名詞を指示する。

- (9)父が、「邦枝は毛唐と結婚するちゅうのか」と罵った時には、その「毛唐」に惚れたのだと心では見栄を切ったものであった。（「地唄」）
当父親咒罵“邦枝难道要跟洋鬼子結婚嗎？”的時候，她心里还得意地想：“我就是看中了这个洋鬼子嘛”。

中国語では、「这个洋鬼子」を照応詞、「洋鬼子」を先行詞とすべきであろう。

コトの中に、中核となる名詞が無くても、そのコト全体を他の名詞(概念)に置き換えて表現できる場合には、やはり「这」を使うことができる。

- (10)しかし彼は数日前，新任の通産大臣が財部総裁にむかって，(留任してもらうことにきまっている…)と言った，その事実をまるで知らないのだ。（『金環蝕』）

但是他完全不知道几天以前新任通産大臣已經對財部總裁說了“決定留你再任總裁”这一个事实。

- (11)わたくしはともかくも，子供等に温いお粥でも食べさせて，屋根の下に休ませることが出来ましたら，その御恩は後の世までも忘れますまい。（「山椒大夫」）

我倒无所谓，只要能讓孩子們喝口熱粥，能在屋檐下歇个宿，这大恩大德也是永生難忘啊。／

(7)以降の例から、文内照応において、「这」「那」および「它」などの照応詞は、一般にはコトを指示する機能をもたない、と言えるように思う。したがって、(1)(2)の「那」は修飾要素である節や句を指示しているとは考

えられない。

4. 談話内照応(1)——対比強調の「その」

コトを指示することができるという「その」の性格は、談話内照応においても、同様に機能する。このような「その」が最もよく機能していると思われるのは、次の例である。

(12) これ、この船中に、一人として虱の恩を蒙らぬ者がござるか。その虱を取って食うなどとは、恩を仇でかえすも同然じゃ。(3: 39—40)

喂，在这只船里，没有一个人不得到虱子的好处。／捉虱子吃，那就等于恩将仇报。／

「その虱」を照応詞と考え、前文の「虱」と同一指示的に理解する、というだけでは、「その虱」の解釈は十分とは言えないと思われる。この場合も、「その」自体を照応詞とみなし、「その」が、「船中の全員が虱の恩を受けている」というコトを指示する、そのコトの内容に対して、「その」を含む文が「恩を仇でかえす」という相反する内容を対比的に示す、と考えたい。「その」はこのような対比効果をもたらすための修辞上の要請から使われている、と思われるからである。「その虱」と前文中の「虱」とを同一指示的に解釈させる機能は、「その」にとって二義的である。

『虱』の中の次の二つも、同様の例である。

(13) 五百石積の金毘羅船が、皆それぞれ、紅白の幟を風にひるがえして、川口を海へのり出した時の景色は、如何にも勇ましいものだったそうである。しかし、その船へ乗組んでいる連中は、中々勇ましがっている所の騒ぎではない。(1: 5—9)

当載重五百石的金毗罗船，分別懸起紅、白幡，隨風飄揚，由河口進入海中，那情景可真是威武啊。／然而，乘船的这伙人，可遠遠談不上那

么威武。

(14) それのみならず、孝経にも、身体髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なりとある。自、好んでその身体を、虱如きに食わせるのは、不孝も亦甚しい。(3: 21-23)

非但这样，《孝経》里还说：“身体髮膚受之父母，不敢毀傷，孝之始也”。樂意把自己的身体讓虱子這類東西去吃，則尤為不孝。

(13)の「その船」と同一指示の語をさがすことは、この場合も一義的に必要とはしない。船に対する「如何にも勇ましいものだった」という描写と、乗船者に対する「中々勇ましがっている所の騒ぎではない」という叙述の対比を効果あらしめるための「その」と考えればよいと思われる。ただし、この例は、直前の文に情報が多すぎ、必ずしも対比が明確に出ているとは言えないところがある。作者の意識としては、多すぎるこれらの情報（「五百石積の金毗羅船」「紅白の幟」「海へのり出した時の景色」など）は、いずれも「如何にも勇ましい」を具体的に表わす道具だてと考えられていたのであろうが。

(13)の「那情景」は、(10) (11)の「这」同様、文脈前方のコトを名詞「情景」に置き換え、それに「那」を加えたものである。「这」ではなく「那」が用いられたのは、遠方からの眺望という描写と関係するのであろう。

(14)の中国語訳は、「その身体」を「自己的身体」としている。訳者は「その身体」の「その」が、同一文中の「自」を指示すると解釈したものと思われる。このような解釈には、照応詞が、名詞のみを指示するという中国語の照応関係の基本的パターンの影響を見ることができる。(13) (14)の中国訳には、「その」に対応する語形は出現しない。

日本語では、このようなパターンの照応関係は、「その」の被修語が代名詞や固有名詞の場合に見られることが多い。

(15) 不肖じゃございますが、この近江屋平吉も、小間物屋こそ致してお

りますが、読本にかけちゃ一かどの通のつもりでございます。その手前でさえ、先生の八犬伝には、何とも批の打ちようがございません。
(「戯作三昧」)

鄙人近江屋平吉只是个賣小雜貨的，雖不才，自認為對小說还是有研究的。就連我對先生的《八犬傳》都挑不出毛病來。

(16) 平井次官は小泉と直接に話しあったことは一度も無い。小泉は官僚出身であり平井は党人派であった。その小泉からいきなり電話がかかって来たということが、彼には納得できなかった。(『金環蝕』)

平井次官从没有和小泉直接談过話。小泉是官僚出身，而平井是从党内提拔起来的。小泉突然打電話給他，他感到很納悶。

(15)の「その」の中国語訳（「就連我」）には、訳者が「その」に対し充分な配慮を払った跡がみえる。中国語の照応の基本的パターンでは、このような「その」は処理しきれないことがうかがえる。(16)の「その」は前方の二つの文が照応先になっている。この「その」は、中国語訳には全く対応するかたちが表われない。

「その」が代名詞や固有名詞を被修飾名詞とすることは、対比強調に使用される「その」は、それ自体照応詞とみなしうることを示すものである。

5. 談話内照応(2)——背景的部分に出現する先行詞と「その」

(16)には、「その」照応先が、先行する二つの文にまで及ぶという例が見られた。「その」は、このように、照応先の範囲を拡張することが可能である。

次の例は、照応先が、前の段落へと広がった例である。

(17) 或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを独りでぶらぶら御歩きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、

何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れております。極楽は丁度朝なのでございましょう。

①やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を蔽っている蓮の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当たっておりますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。

②するとその地獄の底に、犍陀多という男が一人、外の罪人と一しょに蠢いている姿が、御眼に止まりました。(『蜘蛛の糸』)

①过了一会ル、释迦牟尼佇立于荷花池畔，并从浮盖在绿水上的圓荷翠叶間，随意地看着池下的情景。

②于是，和其他一些罪人一起，一个名叫犍陀多的男子在地獄底層不时蠕动的样子，映入了释迦牟尼的慧眼。

このような「その」は、もはや前段中の「池」「地獄」に関する情報を指示する力は弱く、意味内容は希薄で「前述の、既出の」という程度の指示機能しかもたない。したがって、このような「その」は照応詞と認めず、「その十名詞」を照応詞と見るのが妥当であろう。

先行詞の出現する環境について言えば、この場合「その十名詞」の先行詞は背景的部分に出現する(Ⅱ：4-2-C参照)。文意の受け継ぎという点からは、一度背景的部分に沈んだ先行詞を、次の話題展開の際に、再度提示する役割を果たす照応詞である。

次に示す、『風』第三章冒頭の「その船」は、(17)の「その池」「その地獄」と同類の照応詞であり、「その」は「これまで述べてきた(船)」という程度の内容しかもたない。

(18)それから、その船の中では、森の真似をして、虱を飼う連中が出て来た。(3：1-2)

打那以后，船里有些伙伴模仿森権之进，也养起虱子来了。

中国語においては、いずれの訳にも「その」に対応する語形はなく、照応詞は裸の名詞のままである。その裸の名詞の先行詞は、同形の名詞であり、本来中国語の代名詞または「这(那) + 量詞 + 名詞」で受け継ぐことが可能な型である。それがそうならないということは、「その」と「这, 那」がここでも機能上対応しないことを示すものである。中国語では背景的部分に出現する先行詞に対しては、同形の反復を照応詞とする規則が存在すると言いうるのであろう。

中国語について、張世国（亜細亜大学教授）、楊為夫（早稲田大学外国人講師）、吳念聖（早稲田大学学生）の諸氏にご教示を受けた。記して感謝の意を表します。

『虱』以外の文学作品の用例は、新潮文庫より引用した。

中国語の訳文は、以下のものを使用した。

『ころ』 周大勇訳『心』 上海訳文出版社 1983年
『金環蝕』 金中訳『金環蝕』 湖南人民出版社 1980年
「地唄」 文浩若 叶渭渠訳『有吉佐和子小説选』 人民文学出版社 1977年
「山椒大夫」 文浩若編選『日本短篇小説选』 人民文学出版社 1981年
「蜘蛛の糸」 文浩若編『芥川龙之介小説选』 人民文学出版社 1981年
「戯作三昧」 同上

（菱沼 透）

V itu と -nya に関する一考察

——日本語との比較を通して——

1. はじめに

インドネシア語の指示代名詞である 'itu' と、三人称の人称代名詞の属格

形である ‘-nya’ が名詞と共に用いられる場合、前者は、日本語の限定指示用法の「その」と同様の機能を果たし、後者は、日本語の代行指示の「その」と同様の機能を果たす場合が多い。そして、この様な用法の ‘itu’ と ‘-nya’ は、日本語に訳した場合、大抵の場合「その」を当てることが可能である。次にその例を示す。

- (1) Tepat di depan si korban ada sebuah mobil ringsek. Mobil itu sudah tak punya kaca depan dan bemper

(しかし、被害者の真ん前に一台の壊れた自動車があった。その自動車は、既に、フロントガラスとバンパーが無くなっていた.....)

(Intisari No. 239, P. 48)

- (2)... maka gagallah penanaman bawang putih itu. Daunnya menguning dan layu, hingga tak mampu membentuk umbi.

(...それで、その大蒜の栽培は失敗に終わった。その葉は枯れて萎え、その結果、球根を形成することができなかった

(Intisari No. 240, P. 30)

最初の例においては、‘mobil itu’ の ‘itu’ は、その前の文脈に現われる ‘sebuah mobil’ と照応することを示す働きをしている。

二番目の例においては、‘daunnya’ の ‘-nya’ は、‘bawang putih itu’ を承けて、その代行をする働きをしている。

そして、訳文からも判るように、最初の例における ‘itu’ に対しては限定指示用法の「その」を当てることができ、二番目の例における ‘-nya’ に対しては、代行指示用法の「その」を当てることができる。

しかし乍ら、インドネシア語の ‘-nya’ と ‘itu’ は、日本語の「その」とは異なる用法も有る。本稿では、‘-nya’ と ‘itu’ が、どういう点で、日本語のそのと共通し、又、どういう点で、それと異なるかを調査しようとするものである。調査のコーパスとしては、芥川龍之助の『風』のインドネシア語訳である “Kutu” (Cerpelai dan Aneka Kisah 所収) の他に、小説、雑誌、教科書からも広く例文を集めた。尚、 “Ni Rawit Ceti Penjual Orang” の

日本語訳は、『バリ島の人買い』（粕谷俊樹訳）のそれを採用した。

1. itu の用法

a. インドネシア語の指示代名詞の *itu* は、単に長い名詞句の終りを示すために使用されることがある。次がその例である。

(3) Hidup dengan dua betina atau lebih itu dinamai polygami.

（二匹、或はそれ以上の雌と一緒に生活することを多婚性と言う。）

この例では、主語である名詞句の終りに *itu* が置かれているが、次の例のように、述語の名詞句の終りに置かれることもある。

(4) Masih banyak lagi macam-macam tumbuhan di sekeliling rumah di Jalan kebon pala yang pagarnya ditemplei papan kayu empat persegi panjang bercoret “Teater Populer” itu.

（クボン・パラ通りにある家は、塀に、長方形の板が打ちつけてあり、それには、「現代劇団」と書かれていたが、その家の周囲には、もっと多くの種類の植物が植わっていた。）

この文の最後に現われている“*itu*”は、特別な機能を有しているのではなく、単に口調の関係で添えられていると考えられる。先に述べた主語の終りに現われる場合もそうであるが、この場合にも、*itu* によって締めあげられる名詞句の長さが、この種の *itu* の出現と関連があるように思われる。例えば、(4) の papan... 以下を、次のように書き換えると、最後に *itu* を置く必要はなくなるということによっても、この主張は裏付けられる。

(5) ... papan kayu empat persegi panjang yang bertuliskan “Teater Populer”.

次の例も、目的語として機能している長い名詞句の終りに *itu* が添えられているが、この場合の *itu* は、(4) の場合のそれと同じであると俄には断定し難い。

(6) ... diceritakannya pekerjaannya mengangkut mayat sampai tujuh kali itu.

(彼 (I Belog) は七回も死体を運んだことを打ち明けた。)

(Ni Rawit Ceti Penjual Orang, P. 48)

何故なら、この文に先行する部分に、彼 (I Belog) が七回も死体を運んだことについての言及がなされているからである。同書の47頁には、次のような記述が見られる。

(7) “Kebetulan setelah mayat yang ketujuh itu dilemparkannya ke dalam sungai, seorang pengail datang ... Sangka I Belog itulah mayat yang sering kembali itu.

(「偶然、その七番目の死体を川の中に 投げ棄てると、釣りをしていた人がやって来て、…イ・ブログはその人をいつも戻って来る死体だと思ったのさ…。)

従って、この itu 場合のは、単に口調を良くする為に添えられたものとは異なる、前方照応的な働きをする itu と考えるべきであろう。

これまで、名詞句を纏めるために使用される itu について観てきたが、これとは別に、文頭に位置する副詞句や副詞節の終りに置かれて、それらの区切りを示す役割を担っているものがある。次がその例である。

(8) Berkat keberanian, kepandaian dan sifat gotong-royong itu, berhasillah bangsa Indonesia-tua itu mengatasi kesulitan-kesulitan dan bahaya-bahaya yang mengancam hidupnya.

(勇気と、知恵と、協力の精神のお蔭で、昔のインドネシア民族は、困難や、生活を脅かす危険も乗り切ることができた。)

(Sejarah kebangsaan Jilid 2, P. 10)

(9) Karena Daendels bertindak sewenang-wenang dan tidak mempunyai perikemanusiaan itu, maka ia sering bertentangan dengan raja-raja di Pulau Jawa.

(ダエンデルスは、横暴に振る舞い、又憐愍の情を欠いていたので、彼は、屢々、ジャワ島の諸王と衝突をした。)

(Sejarah Kebangsan Jilid 2, P. 37)

最初の文は、berkatに導かれる副詞句の終りに itu が置かれた例であり、後の文は、karena に導かれた副詞節の終りに itu が置かれた例である。この様な用法の itu は、全て、省くことができるが、itu があった方が文の座りが良い。しかし、この場合にも、文頭に置かれた副詞句や副詞節の長さが、itu の出現に関連を有すると考えられる。つまり、副詞句や、副詞節が長くなると、その後に続くべき主語、或は動詞が何時現われるのかを、読み手が予想するのに困難を感じることになるので、読み手の側の解釈に伴う負担を軽減するために、itu が置かれることが多くなると言える。

b. itu は又、総称的に使われる名詞や、抽象的な概念を表わす名詞に添えられることがある。次がその例である。

(10) Gajah itu belalainya panjang.

(象は、鼻が長い。)

(11) Perjuangan itu adalah bapa segalanya, raja dari segalanya.

(闘争は、ありとあらゆる物事の父であり、王である。)

(Mutiar Bacaan Bahasa Indonesia 2, P. 107)

c. itu は、前方照応的に使用される場合がある。この用法の itu は、それが添えられている語が、先行文脈に現われる名詞と同じであるか、又はその上位概念となっている語、若しくは、先行文脈に現われた名詞が持つ属性の一側面を表わす語（以後、これを「言い換え語」と呼ぶことにする）となっている時に使用される。次にこの三つの場合の例を示すことにする。

(12) Sebagai imbalan, mereka tidak ragu-ragu untuk membeli oleh-oleh.

Oleh-oleh itu biasanya dibeli dengan setengah dari uang yang didapat dari pemberi.

(お返しとして、彼等は、躊躇わずにお土産を買う。お土産は、通常、餞別の半分位の金額のものを買う。)

(Intisari No. 240, P. 177)

(13) Cita-cita dan perjuangannya dapat kita baca dalam surat-suratnya kepada sahabat-sahabatnya dan beberapa pembesar di

negeri Belanda, Kartini mulai menulis surat-suratnya itu pada tahun 1899, ketika ia berumur 20 tahun.

(彼女の友人や、オランダの幾人かの高官達に宛てた手紙の中に、私達は、彼女の理想と、闘争とを読みとることができる。カルティニは、彼女が未だ二十歳だった1899年から、この手紙を書き始めたのだった。)

(Sejarah Kebangsaan Jilid 3, P. 5)

- (14) Sekretaris utamanya, Nona Ethel Ione Little yang berumur 55 tahun belum juga datang. Ia jadi khawatir, karena selama bertahun-tahun bekerja padanya, wanita bertubuh kecil itu tidak pernah membolos.

(五十五歳の秘書頭である E. I. L. は、未だやって来なかった。彼は心配になった。というのは、彼のもとで働いてきた長い年月の間、小柄なその女性は、一度も無断欠勤をしたことがなかったからだ。)

(Intisari No. 225, P. 45)

anaphoric な itu は、関係節で述べられる内容の全て、或はその一部が先行文脈で触れられた事柄である場合には、関係節の最後に現われることができる。次例を参照されたい。

- (15) Orang itu rebah, bergumul berbalik-balik dan impit-mengimpit dengan dia. Akhirnya I Pugeg payah juga ; matanya dipukul oleh orang itu dengan sekerate kayu, yang diperolehnya tengah bergumul itu.

(相手の男は倒れ、格闘になって、上になり、下になり、互いに相手の身体を押さえ付けようとした。そして、遂にイプググは力尽きた。その男が格闘の最中に偶然手にした木片で眼を殴られたのだ。)

(Ni Rawit Ceti Penjual Orang, P. 21)

- (16) Ada seorang anak bernama Rita. Ia sangat kaya, tetapi sombong. ... Ia tahu namanya Rita yang sombong itu.

(リタという名前の子供が在った。その子は、とても裕福であったが、

しかし高慢ちきであった。…。彼女は、その名前の主が、あの高慢ちきなりタであることを知っていた。）

(Evaluas, Belajar Kelas 3, p. 5)

最初の例では、関係節中の ‘bergumul’ という語句が、既に前の文脈で一度出て来ているので、それと照応する ‘itu’ が現われている。二番目の例では、関係節中の ‘sombong’ という語句が、既に前の文脈に出て来ているので、これと照応する ‘itu’ が現われている。この種の ‘itu’ は、従って、関係節中の語句の孰れもが、先行文脈との関連を有しない場合には、現われることができない。例えば、次の文に於て、関係節の終りに ‘itu’ を置くことはできない。これは、その部分が全て先行文脈とは何らの係りも有しない新情報を表わしているからである。

(17) Pada hari itu bukan Walter Unger yang berada di situ, tetapi orang lain yang bernama Kenneth Rendell.

(その日、そこに居たのは W. O. ではなく、K. R. という名前の別の人であった。)

(Intisari No. 240, P. 20)

日本語の「その」には、このような使い方はない。もし ‘sekerat kayu, yang diperolehnya tengah bergumul itu’ を、「その格闘をしている 最中に手に入れた一きれの木片」と訳した場合、「その」は、一きれの木片という主要語 (head) の方に掛って行くのであって、関係節中の語句に掛るということはない。

又、日本語においては、修飾句(節)+主要語という構造で、修飾句で述べられている内容が旧情報である場合には、「その」は修飾句の前に置くこともできるし、主要語の直前に置くこともできる。例えば、次の文に於ける下線部内の修飾句の内容(「こぼれた」)は、その前の文脈で既に述べられた情報である。この場合、修飾句の前にある「その」を主要語である煙草の前に移し、「こぼれたその煙草」とすることも可能である。

(18) 或る日片足を蹴込みに掛けて乗ろうとするはずみに手に持っていた巻煙草の袋から中身がこぼれて足許に散らばった。…そのこぼれた煙

草を私は拾ふ事はしなかった。 …… (内田百閒, 『戻り道』)

しかし乍ら、修飾句(節)が新情報である場合には、「その」は主要語の前には置かれるが、修飾句(節)の前には置かれない。例えば、次の文に於ける下線部内の修飾句(「ふところ手をした」)の内容は、新情報であるので、「その」を修飾句の前に置いてそのふところ手をした手とすることはできない。

- (19) 今度の売り家は、二三町先ぎにあった。若葉の艶々と繁った生垣の中に、私と妻はすぐそれらしいものをさがし出し、相当古い平家建ての家を見透かした。珊瑚樹の生垣の裾に、部厚な病葉のつもったのが、如何にも売り家らしかった。もう羽織も要らなくなりかける時分で、ふところ手をしたその手で、所在なく自分の胸の辺りを撫でながら歩いていた私は、垣のうちに話声のするのを聞いた。

(永井龍男, 『青梅雨』)

同様に次の文においても、一種の既知強制によって、文体的効果を狙う場合は別として、新情報の修飾節である「彼が韓国に旅行した時に買ってきた」という部分の前に「その」を冠することはできない。

- (20) 床の間の中央に、大理石の大きな花瓶が置いてある。彼が韓国に旅行した時に買ってきたその花瓶は、湿度により、微妙にその色彩が変化した。

又、次の例では、‘anak umur enam belas tahun itu’は‘Emil’の言い換え語になっているが、‘umur enam belas tahun’の部分は新情報であるので、日本語の訳としては、「その」を主要語である「子供」の前に置いた「十六歳のその子供が適当である。

- (21) Supaya Emil tidak terlalu kecewa anak umur enam belas tahun itu diberi hadiah sepeda motor Blak Arrow Norton yang berkecepatan tinggi.

(エミルが余りがっかりしない様に、十六歳のその子供に、高速が出るブラック・アロウ・ノートンのオートバイが与えられた。)

(Intisari No. 242, P. 68)

「その」とは異なり、「あの」の場合には、主要語に掛る修飾句(節)が新情報であっても、「あの」はその修飾句(節)の前に置くことができる。例えば、次の文では、「あの」と主要語である「講堂」の間に新情報である修飾要素の「大きな」が挟まれている。

- (22) 暫らくお相手をしてゐたが、どうも話しに接ぎ穂がない。未だ定刻にならないか知らと思つてゐると、学生委員が扉の間から顔をのぞけて私を外に呼びだした。廊下に出て聞いて見ると、定刻を過ぎるから早く始めたいと思うがあの大きな講堂の中に聴衆は十四五人しかゐない。
(内田百閒、『戻り道』)

次の文における ‘(yang) kaya raya’ の部分は、新情報であるにも拘らず、itu が付いている。この場合の itu は、1 の d の用法の itu であり、読み手や聞き手は知らなくても、書き手や話し手が、良く知っている事柄に付けられる。そしてこの用法の itu は、yang の前の名詞句について書き手や話し手が良く知っていれば、yang で導かれる関係節内には、読み手や聞き手にとっての新情報が現われても構わない。従つて、この用法の itu は、今問題にしている itu とは異なる類のものと言うべきである。

- (23) “... Tetapi Ida Wayan Ompog yang kaya raya itu ... Ratu, Daya yang manis, sukakah Ratu mendengarkan tutur kata hamba?”

(「… だけど、あのお金持ちのイダ・ワヤンでしたら……ねえ、お嬢さん、私の話を聞いて下さいますか?」)

(Ni Rawit Ceti Penjual Orang, P. 13)

この文においては、先行文脈で、Ida Wayan Ompog が金持ちであるという事は述べられていないので、この itu は、anaphoric な用法の itu とは異なるものと考えなければならない。

又、次の例の様に、同格の名詞句と、それが修飾する名詞句との関係について、既に先行文脈で言及がある場合には、その同格名詞句に itu を付けることができる。

(24) Aku maklum sudah tak dapat tidak ujud itu tak lain daripada ujud Gusti Gurda, musuhku itu.

(俺はその物体が、敵のグスティ・グルダのものに絶対に間違いないと見破っていたんだ。)

(Ni Rawit Ceti Penjual Orang, p. 9)

この前の文脈で、既に、Gusti Gurda が Ida Wayan Ompok の敵であることが述べられているので、“Gusti Gurda”と同格の関係にある“mushku”に、既知の情報であることを示す *itu* が付加されている。

インドネシア語の ‘*itu*’ は、それが付加された名詞句が単に先行文脈や先行談話内で一度出てきたという事を示すだけで、二度目に現われれば名詞句が、先行文脈や先行談話内のある名詞句と照応関係にあることを示す機能を殆ど果たさない場合がある。その顕著な例は、‘*itu*’ が固有名詞に付加される場合である。固有名詞は普通名詞とは異なり、それ自身で限定された referent を指示する名詞であるので、殊更、同一の referent を指示する二つの同一の固有名詞間に照応関係が成立することを示す手立てを必要としないにも拘らず、インドネシア語では、その前に一度先行文脈や、先行談話内に現われた固有名詞には、その二度目の出現の際に、*itu* を付加することがある。例えば、次の文において、固有名詞の ‘Sriwijaya’ は二度現われているが、その二度目の出現の時に、*itu* が付加されている。

(25) Meskipun Raja Cola yang bernama Rajendra itu tidak berhasil menghancurkan Sriwijaya, tetapi keadaan angkatan laut Sriwijaya itu menjadi lemah karenanya.

(ラジェンドラという名前のチョラの王は、スリウイジャヤを滅すことに成功しなかったが、スリウイジャヤの海軍は、それが為に、弱まった。)

(Sejarah Kebangsaan Jilid, P. 37)

このような場合、日本語では、「その」が付かないのが普通である。

d. *itu* には、ある名詞或は名詞句が、先行文脈で何らかの言及がされていなくても、それが、聞き手、或は読み手も当然知っているはずと考えられる

ものである場合には、それに添えて、日本語の「あの」が果たす役割にほぼ相当する意味で使用される。

- (26) Tahun 1946 terjadilah peristiwa “Bandung Menjadi Lautan Api” yang terkenal itu.

(1946年に、あの有名な、バンドンが火の海となった事件が起こった。)

次に掲げるのは、“Ni Rawit Ceti Penjual Orang”の冒頭部分にある会話である。

- (27) “Ni Rawit?” tanya Ida Wayan Ompog dengan semu heran.
“Ya, Kanda, bekas penari legong dari Lukluk itu.

(「ラウィトだって」とI. W. O.は少し驚いて尋ねた。「そうだよ、あのルクルク出身の元レゴンダンスの踊り子だった女だよ」)

(Ni Rawit Ceti Penjual Orang, P. 7)

この会話文の中で、‘bekas penari legong dari Lukluk’に‘itu’が付いていることから、この元踊り子をI. W. O.も知っていることが読み手には判る。又、この種の‘itu’は、聞き手や読み手が必ずしも良く知っているとは限らないものに付けることにより、そのものが恰も周知のものであるかの様に取り扱うことにより、尋常ならざる導入によって引き起こされる心理的衝撃の効果を狙う場合がある。この種の手法は、特に、小説等の冒頭の部分に使用されることが多い。

次の文は、文体的効果を狙った既知強制の‘itu’が現われる例である。

- (28) Semula Amri mau membohong. Tapi dia takut sekali pada pandang mata ibunya yang jernih dan penuh kasih itu.

(最初は、アムリは嘘を言おうと考えた。しかし彼は、母のあの透んで慈しみに満ちた眼差しがとても怖かった。)

(Belajar Berbahasa 1A, P. 19)

この文に於て、アムリの母の眼差しを読み手は知らないが、‘itu’を付けることにより、読み手を作者の心理的縄張りの中に引き込み両者の間に、体験の

共有空間を創り出す効果を狙っている。

2. -nya の用法

接尾辞の -nya の用法は、多岐にわたるが、ここでは、属格代名詞として使われる -nya に考察の対象を絞り、副詞を作ったり、名詞を作ったりする派生接辞としての -nya の用法については、当面の問題とは、直接の関連がないので、それについて触れることはしない。属格代名詞として使われる -nya の用法を大別すると次のようになる。

a. 主題文において、陳述部の主語となる要素に添えられ、主題を承ける。例えば、次の文で、-nya が付いた要素は、陳述部の 述語動詞の主語として働き、-nya は、主題である manusia を承けている。

(29) Manusia tidak juga bisa dibekukan otaknya oleh propaganda.

(人間は、宣伝運動によって、その頭を硬直化させることはできない。)

このことは、上記の文を、次の (30) のように無題文に変換してみれば、はっきりする。

(30) Otak manusia tidak juga bisa dibekukan oleh propaganda.

(人間の頭は、宣伝運動によって、硬直化させられることはない。)

つまり、-nya は、主題が属格的関係に於て、陳述部の主語を修飾する場合、この主題の代わりに用いられる代名詞であると言える。

b. -nya は、文の境界を超えて、ある名詞句と照応関係を結ぶことができる。-nya が付く名詞は、文の境界を超えたところにある先行詞の一部を成していたり、先行詞によって所有されるものを表わしていることが多い。

次の例では、-nya とそれが付く名詞との間に、所有一被所有の関係が構成されている。

(31) Ida Bagus Ngurah termenung mendengar bual itu. Berlainan benar dengan Nengah Cengkok, bujangnya, yang duduk di sudut serambi.

(イダ・バグスはその高言を聞いて、黙って考え込んでいた。それは
ベランダの隅に坐っている下男のイ・チュンゴとは全く対照的であ
った。)

(Ni Rawit Ceti Peujual Orang, P. 10)

又、次の例では、-nya とそれが付く名詞との間に、全体一部分の 関係が構
成されている。

(32) ... maka gagallah penanaman bawang putih itu. Daunnya
menguning dan layu, hingga tak mampu membentuk umbi.

(…大蒜の栽培は失敗する。その葉は黄ばみ、萎れ、球根を形成する
ことができなくなる。)

しかし乍ら、-nya とそれが付く名詞との間の関係は、日本語の助詞「の」
が多様な意味を有するのと似て、上に述べた二種の関係だけに限られるの
ではない。例えば、次の (33) は、-nya が付いた 名詞を動詞にした場合に、
-nya はその目的語の関係に立つ様な例である。

(33) Gedung itu adalah sebuah restoran. Pemiliknya bernama
Kadir Karayigit, usianya 42 tahun.

(その建物は、一軒のレストランであった。その持ち主の名前は、
Kadir Karayigit で、年齢は、四十二歳であった。)

(Intisari No. 238, P. 46)

更に、もう少し複雑な関係を表わす場合もある。例えば、次の例では、-nya
の部分は、“yang dipelajarinya” (彼が学んだ) という表現で言い換えられ
るような意味を持った圧縮表現となっている。

(34) Di Universitas Bonn, Jerman Barat, ia belajar ekonomi
sekitar 5 tahun. “Japi tidak sampai tamatnya,” ujarnya. Ilmu
ekonominya ini tampaknya tak ada hubungan dengan kepolisian-
nya.

(西ドイツのボン大学で、彼は、五年程 経済学を 学んだ。「しかし、
卒業するまでには到らなかった」と彼は述べている。彼が学んだこ
の経済学は、彼の警察官としての職務には 関係がない様に 思われ

る。)

(Kompas, 25 Juli 1982)

以上は、全て、文章内に、照応詞としての -nya が現われる例であるが、談話内に於ても、-nya は、文章内に於けるのと同様、先行談話内に現われた語、或は表現を先行詞とする照応詞として働く。次がその例である。

(35) A : O, itu tikar.

B : Kamu mau beli ?

A : Ya. Tapi kita tanya dulu harganya.

A : あっ、座があるわ。

B : 買うんですか ?

A : ええ、でも、先ず、その値段を尋ねてみましょう。

この例に於ける *harganya* の -nya は、前の文脈に出てくる *tikar* を承ける照応詞として働いている。

c. 前節で述べた、-nya の用法は、全て先行文脈、若しくは先行談話内に先行詞を有するもので、代行指示的な使われ方をする日本語の「その」の用法に通ずるものがある。-nya は、このような用法の外に、先行詞が先行文脈、若しくは先行談話内に現われず、先行文脈や先行談話、或は、会話が行われるその場の状況から自ずと限定を受ける名詞に付加されて、限定詞の如く機能する場合がある。次がその例である。

(36) "... Oleh sebab itu sebaiknya kau tetap ikut berdarmawisata.
Tentang uangnya biarlah papa dan mama yang menanggungnya.

(「だから、お前は、旅行にお行き。お金のことは パパと ママに任せ
ておき。」) (Evaluasi Belajar B. I. untuk kelas 4, P.27)

(37) Dengan belalai itu, gajah mengisap air. Kalau air itu hendak diminum, belalainya dibengkokkan ke mulut. Lalu airnya disempatkan ke dalam mulut.

(鼻で、象は水を吸う。水が飲みたければ、鼻を口の方へともっていき。それからその水を口の中へと吐き出す。)

(Evaluasi Belajar B. I. kelas 3, P.17)

前の例において、uangnya の -nya は、先行文脈に現われる 他の語の代わりをしているのではなく、‘uang’に先行文脈から自ずと導かれる限定、つまり「旅行に必要な」という限定を与える役目を果たしている。後の例においても、前の例と同様、airnya の -nya は、‘air’ に対して、「象がその鼻で吸ったところの」という限定を与えている。この例では、‘air’ という名詞が、‘airnya’ より以前に、二度現われているので、anaphoric な機能を有する ‘itu’ と交換が可能である。しかし、次の例では、‘putarannya’ の ‘-nya’ を ‘itu’ で置き換えることはできない。

- (38) Yang terakhir memutar uraian dan putarannya harus sesuai dengan arah jarum jam.

(最後の者が縄繻い機を回す。そして時計の針と同じ方向に回さなければならない。)

(Mari Membuat Sendiri, P. 12)

これは、ある事柄に関する叙述が未だ完了していない。途中の段階で、その事柄を意味する語に、anaphoric な機能を有する itu を付けることは許されない原則が働くからであろうと思われる。つまり、この例で、叙述の中心となっている事柄は、縄繻い機の回し方であるが、putarannya 以下に於ても、これを巡っての叙述は続いているので、叙述の途中の段階で、「回し方」を意味する名詞 (puta ran) に anaphoric な itu を付けることはできないということになる。次の例に於ける -nya も、itu と交換できない種類のものである。

- (39) Sebelum berpraktek terlebih dulu sediakanlah alat-alatnya.

(作業を始める前に、先ず、道具を用意しなさい。)

(Mari Membuat Sendiri, P. 14)

ここで用いられている -nya は、先行の文脈から自ずと限定されていることを示す機能を有しているので、先行の文脈に、道具についての言及が全然なくてもよいが、もし、この -nya を itu で置き換えた場合には、itu の有する anaphoric な性質からして、先行文脈に、道具についての言及がなされていることが要求される。又、次の様な文も、会話の最初に発話される場合

には、この形でなくてはならず、-nya を itu で置き換えることはできない。

(40) Di mana sabunnya?

(41) Ambil teleponnya.

これらの文が発話されるには、問題になっている sabun や telepon が他の同種のもとと区別するに足る状況が存在していればよい。itu も限定詞として使用されるものであり乍ら、この様な場合に使用できないという事実は、itu が anaphoric な機能を強く有していることを示していると思われる。(40) と (41) に相当する日本語の表現は、夫々、次の (42) と (43) であろうと思われる。

(42) 石鹸はどこだ。

(43) 電話を取ってくれ。

つまり、日本語では、件の状況に於ては、「その」や「あの」を付けずに表現すると言える。更に又、-nya は、次の例に於ける様に、二人称の代名詞の属格の代わりとしても用いられるという。

(44) Di mana mobilnya?

(君の自動車は何処?)

しかし、このような例における -nya は、上記のような考え方を採らないでも説明できると思われる。この場合の -nya も、前出の (40) や (41) と同様に、発話の状況によって自ずと限定されることを示す -nya の特殊なケースと考えることもできる。つまり、話し手と聞き手しかいない状況下で、(44) が発せられれば、通常の場合、‘mobil’ は「話し手の」という限定を、優先的に受けることになる。しかし、この様な考え方に立てば、この場合の -nya には、二人称の代名詞の属格以外の解釈が与えられる余地を残すが、実際に、予想通り、-nya は、状況次第では、第三者の車をも意味し得る。以上のことから、後者の考え方を採る方が、より、言語事実に即しているように思われる。

次の例に於ける ‘tempatnya’ の -nya も、前に出てきた ‘tempat ngipri’ と照応することを示しているのではなく、発話の場面から自然と限定を受ける

ことを示す機能を果たしているので、その前の文脈に現われる ‘tempat itu’ の itu とはその用法を異にしていると言える。従って、下記の例における下線部を日本語に翻訳すれば、「場所はどこか知っているのか？」となり、「その場所はどこか知っているのか？」では不適當であると言える。

- (45) “Bagaimanakah pendapatmu kalau kita mencoba untung pergi ke tempat ngipri?” tanya wangsa setengah berbisik ...

Atung terdiam sejenak. Tak nampak wajahnya bersinar seperti gembira, karena ada teman yang mengajaknya pergi ke tempat itu. Ia sendiri ragu-agu pergi. Ia sejenak merenung, seakan-akan mempertimbangkan ajakan wangsa. Akhirnya ia berkata, juga berbisik “Tahukah kau di mana tempatnya?”

(「運試しに tempat ngipri に行こうと思うがどうだい」とワンサが半ば囁く様に言った。…アトウンはちょっと考えた。彼の顔は、友達がそこへ誘ってくれて嬉しいという風には見えなかった。彼自身は、行ったものかどうかと躊躇っていた。彼は、ワンサの誘いについて思いを巡らしているかの様に、しばし考え込んでいた。ついに彼は、囁き声で、「場所を知っているのかい？」と言った。

(Lagak Ragam Bahasa Indonesia Jilid I, P. 13)

次の文に於ける ‘kutunya’ の -nya も先の例のそれと同じ機能を果たしていると考えられる。

- (46) Tambahan pula, dalam kapal banyak sekali kutu. ... Dan jika sampai menyentuh kulit maka binatang-binatang itu langsung mulai beraksi sampai menggelenyar. Sekiranya hanya lima atau sepuluh ekor saja kutunya, masih dapat dikuasai

(その上、船の中には、虱が沢山いた。…そうして、それが人肌にさえさわれば、すぐに、いい気になって、ちくちくやる。それも五匹や十匹なら、どうにでも、せいとうのしょうがあるが…)

(Cerpelai dan Aneka Kisah, P. 11)

この場合にも、‘kutunya’ の -nya は、二番目のセンテンスに出てくる bina-tang-binatang itu’ の itu とは異なり、最初のセンテンスに出てくる ‘kutu’ と照応することを示す機能を果たしているのではなく、全体の文脈の中で自ずと限定を受けるということを示している。‘kutunya’ が現われる文脈に於ては、事実の描写が行なわれているのではなく、仮想的事実が述べられているために、事実描写になっている最初のセンテンスに現われる ‘kutu’ との照応をはっきり示す ‘itu’ よりも寧ろ、最初のセンテンスの ‘kutu’ との直接的関連が遮断される -nya の方が選ばれたと考えられる。

3. itu と -nya の相互関係

1.C. の用法の itu は、前方照応的に用いられるのに対して、2.C. の -nya は、そうでない環境で用いられるのであるから、これら二者は、相互排他的関係にある。例えば、前出の (12) に於ける, oleh-oleh itu の itu を次の様に -nya で置き換えるわけにはいかない。

(47) Sebagai imbalan, mereka tidak ragu-ragu untuk membeli oleh-oleh.

Oleh-olehnya biasanya dibeli

(Intisari No. 240, p. 177)

何故なら, oleh-oleh という語は、既に、最初のセンテンスに出ているのであるから、二度目にこれを受ける時には、anaphoric な itu を使う必要があるからである。逆に、2.C. の -nya を itu で置き換えることが不可能であることは、既に前節で観た通りである。1.C. の itu と 2.C. の -nya が相互排他的であるということから、これら二種の限定詞の重出は許されないであろうという予想を立てることができる。そして、実際に、次のような文は、不適格文となる。

(48) Oleh sebab itu sebaiknya kau tetap ikut berdarmawisata. Tentang uangnya itu, biarlah papa dan mama yang menanggunya.

(Evaluas, Belajar B. I. Kelas 4, p. 27)

次に、1. C. の *itu* と 2. b. の *-nya* との相互関係について考察してみる。
 2. b. の用法に於ける *-nya* は、*-nya* が付される名詞に就いての言及が先行文脈でなされることを必要としないのに対して、1. C. の *itu* は、それが付される名詞に就いての何らかの言及が先行文脈でなされていることを要求する。従って、それ以前に *-nya* が付いた名詞についての言及がないのに同時に *itu* が付くということはない。次の例では、*-nya* が付された名詞が初めて出現したにも拘らず、*itu* を伴っている。これは *-nya* が付された名詞そのものは、それ以前の文脈に現われていなくても、それと意味の上で相等しい別の語についての言及が先行文脈で行われているからであると考えられる。

(49) Gedung *itu* adalah sebuah restoran. Pemiliknya bernama Kandır Karayigit, usianya 42 tahun.

Omar Demir bermaksud melapor sekarang juga, meskipun mungkin majikannya *itu* sedang tidur.

(その建物は一軒のレストランであった。その持ち主は、K. K. で、年齢は42歳であった。O. D. は、多分彼の主人は眠っているかも知れないが、即刻に報告をしようと思っていた。)

(Intisari No. 238, P. 46)

(50) Ia amat cinta kepada Ratu, dan Ratu sendiri pun, seperti kata Ratu tadi, tak ada salahnya membalas kasihnya *itu* kepadanya.

(あの方はお嬢さんのことがとっても好きなんです。さっき、おっしゃったように、お嬢さん御自身、あの方の愛情に応えてあけても、別に構わないわけでしょう。)

(Ni Rawit Ceti Penjual Orang, P. 14)

最初の例では、majikannya と referent を等しくする pemiliknya に就いての言及が、先行文脈でなされているので、anaphoric の *itu* が使用できるのだと考えられる。後の例に於ては、kasih という名詞そのものは初出であるが、それと意味の上で関連のある動詞の ‘cinta’ が先行文脈に現われてい

るので、anaphoric の itu が、同一の名詞が二度繰り返される場合に準じて、使用されているのだと考えられる。こういう場合を除けば、最初に、ある名詞に -nya が付いた時に、同時に itu が付くということはない。

しかし乍ら、itu が付いた名詞が二度目に現われる時には、anaphoric な itu と共起することができる。次がその例である。

- (51) Cita-cita dan perjuangannya dapat kita baca dalam surat-suratnya kepada sahabat-sahabatnya dan beberapa pembesar di negeri Belanda, Kartini mulai menulis surat-suratnya itu pada tahun 1899, ketika ia berumur 20 tahun.

(彼女の友人や、オランダの幾人かの高官達に宛てた手紙の中に、私達は、彼女の理想と、闘争とを読みとることができる。カルティニは、彼女が未だ二十歳だった1899年から、この手紙を書き始めたのだった。)

(Sejarah Kebangsaan Jilid 3, P. 5)

この文において、surat-suratnya は二度現われているので、二度目に出現する時には、anaphoric な -nya が付いている。

以上の例では、-nya と itu が連続して現われていたが、この他に、-nya と itu の間に、関係節や形容詞が割り込む形の不連続なパターンを示すものがある。次がその例である。

- (52) Banyak orang yang mengagumi So crates dan datang berkumpul di sekelilingnya untuk mendengar keterangan serta mencoba menjawab pertanyaan-pertanyaannya yang cerdas dan lucu itu.

(多くの人がソクラテスに畏敬の念を懷いて、彼の周りに集まってきた。そして、話を聞いたり、機智に富んだ、面白い質問に答えようとした。)

(Evaluasi Belajar B. I. untuk S. D. 6., P. 19)

この例において、-nya と itu の間に介在している修飾語句を取り去っても、それによってこの文の理解が妨げられるということはないので、この様な不連続な -nya と itu のシークエンスに於いても、連続している場合と同様、

itu は -nya と名詞の結合全体に掛り, anaphoric な機能を果たしていると言える。-nya が現われない, 次の様な例に於ても, 同様に, itu を, yang の前にある名詞句に直接付け, yang ... の修飾節を取り去っても, この文の適格性に変化は生じない。

- (53) Pada suatu hari datanglah kuda yang telah menjadi piaraan manusia itu datang menemui rajawali sahabatnya. Burung yang besar dan gagah itu sedang melepaskan lelahnya diatas dahan pohon.

(ある日, すっかり人間に飼い馴らされたその馬が, 友達の鷲に会いにやって来た。その大きくて勇猛な鳥は, 木の枝の上で休んでいるところだった。)

つまり, この場合にも, itu は, rajawali と burung yang besar dan gagah とが照応関係にあることを示す機能を果たしている。

又, 次の文は, 名詞と itu の間に, yang が付かない修飾語句が介在している例であるが, この場合も, (53) の例に於けると同様, その修飾語句を取り去っても, 文の適格性に変化がない。

- (54) Ikan purba caelacanth yang tadinya dikira telah punah, ternyata masih tersisa. Ikan berkulit tebal itu diperkirakan hidup sejak 350 juta tahun yang lalu.

(これまで, 既に絶滅したと考えられてきた古代魚シーラカンスは, 未だ生存していることが明らかとなった。その厚い皮に覆われた魚は, 3 億 5 千年前から生きていると考えられている。)

(Kompas, 9 Juli 1982)

この文に於ても, itu は, 二度目に現われた ikan が, その前の文に現われる ikan purba Caelacanth と coreferential であることを示す anaphoric な機能を果たしている。

語を承けるのではなく, 一文若しくは複数の文の集合を承ける照応詞としては, itu と -nya の両方が使用される。そして場合によっては, この両者

は相互に転換可能である。例えば、次の文では、*karenanya* の *itu* を *-nya* で置き換えることも可能である。

- (55) Ikan yang diperoleh tentu memerlukan tempat untuk menyimpannya. Oleh karena itu marilah belajar membuat tempat ikan atau biasa juga disebut kempis.

(獲った魚は、それを入れておくための容器が必要となる。それ故、魚を入れておくもの、つまり一般には、*kempis* と呼ばれているものの作り方を学ぶことにしよう。)(Mari Membuat Sendiri, P.42)

しかし乍ら、場合によっては、*-nya* の使用が義務的であることもある。例えば、次の二例に於て、*-nya* を *itu* で置き換えることはできない。

- (56) Pada ujung sebelah kiri sumbatlah dengan kayu gabus atau hati dahan nipah. Maksudnya agar waktu ditiup udara tidak keluar kesebelah kiri dan terdengarlah suara suling itu.

(左の端にコルク、若しくはニッパ椰子の枝の芯で栓をする。これはつまり、吹いた時に、空気が左端から逃げないで、その笛の音が出るようにする為である。)(Mari Membuat Sendiri, P.40)

- (57) “Tuhan maha kuasa, harimau. Kami bangsa kambing dijadikan binatang yang buas sekarang. Jadi makanan kami adalah harimau seperti kau. Aku baru saja makan seekor harimau.”

“Tipumu tidak bisa termakan olehku, Kambing. Mana buktinya?”

(「全能の神、虎よ。我々山羊族は今や獰猛な動物と化した。それであるから、お前の様な虎が我々の餌だ。俺は、今も一匹の虎を食べたばかりだ。』

「その手は食わないぞ。何処にその証拠があるというのだ」)

(Evaluasi Belajar B. I. Kelas 4, p. 14)

これは、名詞の後に置かれた *itu* は、限定指示の機能しか果たさず、代行指示の機能は果たさないことに起因すると思われる。つまり、もし、上記二例

に於ける *maksud* と *bukti* に *itu* を付けると、その *itu* は専ら限定指示の機能を果たすので、その前の文脈で、一度、*maksud* や *bukti* という語が現われているか、若しくは、これらの語によって言い換えられる様な事柄に就いての言及がなされていなければならないことになる。ところが、これら両例に於ては、*maksud* も *bukti* も初出の語であり、その後には付いている *-nya* は、先行文脈の一部を承け、その代行をしているので、これらの環境に於ては、*-nya* のみが出現可能ということになる。それでは、(oleh) *karena* の後で、*itu* が出現可能であるのは、どう説明したらよいのであろうか。*karena* を名詞と考える限り、その後の *itu* は限定指示の機能を果たし、その後の *-nya* は代行指示の機能を果たしていると言わざるを得ない。しかし、*-nya* も *itu* も共に、先行文脈の一部を承けてその代行をしているのは明らかであるから、*itu* が限定指示の機能を果たしていると考えすることはできない。とすれば、残る解決法は、*itu* を取っている場合の *karena* は名詞ではなく前置詞と考えることである。こう考えれば、動詞の目的語の場合と同様、前置詞の目的語の場合には、*itu* も *-nya* と同様、先行文脈の代行をすることができるので、この位置に於ける *itu* の出現の可能性が説明できる。*karena* がその後には *itu* も *-nya* も取れるというのは、とりもなおさず、この語が名詞と前置詞の間で揺れていることを示している。

-nya は、後続の文を承ける時にも義務的に使用される。例えば、次の文では、*-nya* は下線を施した後続の文を承けていると考えられるが、これら両例に於て、*-nya* を *itu* で置き換えることはできない。

- (59) Inilah alasannya maka kita tidak boleh menganggap rendah cerpelai itu.

(こういう訳で、我々は、虱を侮ることはできないのである。)

(Cerpelai dan Aneka Kisah, P. 9)

- (60) Barangkali saatnyalah bagi kita untuk mempersiapkan diri.

(多分、我々が準備すべき時であろう。)(Kompas, 12 Januari 1982)

訳文からも判る様に、この様な場合、*-nya* は「その」等の日本語で訳され

ることではない。

又, “Kutu”の中には, 次の様に, “segalanya itu” という表現が出てくるが, この場合の -nya は, 慣用的に使用されるものであり, -nya を取り去った “segala itu” の形で置き換えることはできない。

- (60) Dan sementara samurai dalam kapal itu hampir saja bertumpahan darah tentang kutu, maka, kapal kompira 500 koku, seakan-akan tak perduli akan segalanya itu dan terus melaju ke barat ...

(こう云う具合に船中の侍たちが, 虱の為に刃傷沙汰を引き起こしている間でも, 五百石積の金毘羅船だけは, まるでそんな事には頓着しないように, …西へ西へと走って行った。)

(Cerpelai dan Aneka Kisah, P. 113)

これに対して, semua は, -nya を吸収した意味での semua itu が可能である。次例を参照されたい。

- (61) Semua diperlihatkannya; perhiasan yang indah-indah, pakaian yang kemilau, gedung yang mengagumkan. Semua itu katan-ya akan menjadi milik saya kalau saya mau menjadi isterinya.

(彼は全ての物を見せた。美しい装飾品, 輝くばかりの着物, 驚く程立派な屋敷を。彼は, もし私が彼の妻になれば, それら全てが私のものとなるのだと言った。)

segalanya, 或はその強調形である segala-galanya は, 無限定の全ての意味で用いられる。

- (62) Saya ingin memberikan segala-galanya untuk mengetahui apa yang sedang dipikirkannya.

(彼が今何を考えているかを知ることができるんだったら, 全てをあげてもいい。)

(Echols & Shadily, Kamus Inggris Indonesia, P. 63)

- (63) Perjuangan itu adalah bapa segalanya, raja dari segalanya.

(闘争は全ての父であり王である。)

(Mutiarā Bacaan Bahasa Indonesia, P.107)

これに対して, semuanya は, 次の例に見られるように, ある限定された全体を示す。言い換えると, この場合の -nya は, 先行文脈中の語を承ける anaphoric な用法であると考えられる。

- (64) Ketiga-tiganya menutup mulut seakan-akan sudah sepakat. Tambahan pula mereka tidak bergerak bebas, dan mereka seakan-akan sangat berminat terhadap sesuatu yang akan terjadi, semuanya menahan napas.

(この三人が三人とも, 云ひ合せたやうに, 口を噤んでゐる。その上, 碌に身動きさへもしない。何か, これから起らうとする事に, 非常な興味でも持ってゐて, その為に, 皆, 息をひそめてゐるのではないかと思はれる。)

(Cerpelai dan Aneka Kisah, P.18)

次の様な主題文においても, 主題を承ける -nya は, semua には付くが, segala には付かない。

- (65) Kambing dan lembunya dijualnya semuanya.

(彼は, 山羊と牡牛を全て売った。)

- ※(66) Kambing dan lembunya dijual segalanya.

そして, semuanya の -nya は常に, 先行文脈で出てきた語句の代行をしていて, segalanya のように, 無限定の全てを表わす意味では使われない。以上の事を纏めて図示すれば次の様になる。※が付いているものは, その形を欠いていることを表わす。

無限定	※semuanya	segalanya
限定	semuanya	※segalanya
	semua itu	※segala itu
	semuaya itu	segalanya itu

引 用 作 品

- Ryunosuke, Akutagawa (1976), *Cerpelai dan Aneka Kisah* (disadur oleh Drs Hasan Amin). Jakarta: PN Balai Pustaka
- Anak Agung Pandji Tisna (1978), *Ni Rawit Ceti Penjual Orang*. Jakarta: Pustaka Jaya
- Y. Wiramiharja dkk. (1974), *Sejarah Kebangsaan* Jilid 1~3. Bandung: Penerbit Binacipta
- M. Hutauruk SH dkk. (1975), *Lagak Ragam Bahasa Indonesia* Jilid I ~ III. Jakarta: ERLANGGA
- Drs. I. Sutardja (1973), *Belajar Berbahasa* IA. Yogyakarta: Penerbitan Yayasan Kanisius
- Ayo Yahya Heryanto (1977), *Mari Membuat Sendiri*. Jakarta: PN Balai Pustaka
- A. A. Panji Tisna (1982), 『バリ島の人買い』(粕谷俊樹訳), 東京: 勁草書房。
(正保 勇)

Ⅵ. 「この/その＋名詞」とそれに対応するポルトガル語の表現(1)

1. 考察の範囲

ここでは、芥川龍之介の『虱』をもとに、まず日本語での「この」「その」に被修飾名詞の付いた形の照応詞を取り上げ、次に『虱』のポルトガル語訳をもとに、日本語で考察の対象とした範囲でそれに対応するポルトガル語の表現に含まれる問題について考える。

『虱』における「この／その＋名詞」の用例は、全部で24例あり、「この＋名詞」、「その＋名詞」、それぞれ12例ずつであった。ここには、「この」「その」と名詞の間に別の修飾成分があるものも含まれている。この、全てで24例という数は、「この／その＋名詞」の問題の全体を論じるためには少なすぎると思われるが、林四郎の「指示連体詞『この』『その』の働きと前後関係」(1972)の概括に従って、分類整理してみると次のようである。

なお、以後、用例は、「この／その＋名詞」、文節（あるいは、文節のつら

なり), 句 (あるいは, 句相当のもの), 文 (一部を省略することもある。文の途中省略は, ……で示したりする。) などで例示したりするが, ここでは「この/その+名詞」の形で示す。また, 必要に応じて用例中の「この」「その」には下線(＝)を, その被修飾名詞と, 先行文脈中の先行詞には下線(一)を付す。これも林四郎の方式の踏襲である。

- (1) 「この」「その」が現場指示に働く……3例
「この+名詞」……この権之進, この虱, この船中
「その+名詞」……なし
- (2) 「この」「その」が文脈代行指示に働く……2例
「この+名詞」……なし
「その+名詞」……その臭気, その襟元
- (3) 「この」「その」が文脈限定指示に働く……13例
「この+名詞」……この男 (4例), この連中 (2例), この Pré-
curseur, この騒ぎ
「その+名詞」……その船 (2例), その取った虱, その身体, その
虱
- (4) 「この」「その」が文脈限定指示に働いても, 被修飾語が形式名詞である場合……6例
「この+名詞」……この頃,
「その+名詞」……その上 (2例), その位 (2例), そのまま

以上分類してみると、『虱』というひとつのまとまりのある作品の中に, 用例の数は少ないといえ, 「この」「その」の全体を見渡すに足る用例が一応含まれていることはおもしろい事実である。ただ, ここでは上に分類したもののうち(3)を考察の対象とする。つまり, 「この」「その」の働きが現場指示ではなく, 文脈指示であり, そのうち被修飾語が形式名詞である場合は含めず, 被修飾名詞が一般の名詞である場合のものである。上記の林四郎の言葉

を借りれば、それは「近い先行文脈の中に、それらの被修飾語と同形乃至極めて近い関係にある語句をもつのがふつうである」ものである。

2. 「この」「その」の文脈限定指示としての機能

まず、上にあげた(3)の用例を簡単に検討していこうと思う。最初に「この／その＋名詞」を含む文を順にあげ、先行詞の問題などに言及する。その場合、「この」「その」に分け、それぞれの中では『虱』の中での出現順に従う。全体を通して用例には、①②……の通し番号を付け、以下の言及でもこの番号を利用する。また、用例文の最後に『虱』の章、行を（章：行）の形で示す。

「この＋名詞」

①「この男」……この男だけは不思議に、虱をとらない。(2:2~3)

前文中の「これは……御徒士である。」の「御徒士」にすぐ照応し、さらに一行前には「……妙な男が一人いた。」の「男」がある。「妙な男」に対して、「これは……御徒士である。」の一文は、補足説明の形になっていて、①の「この男」から「この男」の行動、状態の描写に入る。

②「この男」……この男だけ、虱に食われないのかと云うと、又そうでもない。(2:7~8)

①の「この男だけは……」の描写が続き、段落が変わって、再度、指示し直す際に現れている。

③「この男」……この男の腹では、いくら依怙地な森でも、閉口するだろうと思ったからである。(2:22~25)

前文中の「同役は……虱を……とりためた。」の「同役」に照応している。①では「御徒士」→「この男」、③では「同役」→「この男」という言いかえの問題がある。

④「この連中」……この連中も、……外の仲間と別に変わらない。(3:2~3)
前文中の「……虱を飼う連中が出て来た。」の「連中」に応じている。

⑤「この男」……この男はそうではない。(3:15)

「これも亦妙な男で、……」と、その妙な「男」の描写が続いた後、他の連中との対比で「この男はそうではない」と指示し直す形で、同じ段落内で用いられている。

⑥「この連中」……この連中の言い分によると、……決して温まるものではない。(3:19~20)

前文中の「……加担する者は可成りいる。」の「者」を受けている。

⑦「この Précurseur」……そこでこの Précurseur が腹を立てた。(3:32)

前文中の「森が来てみると、もう一匹もいない。」の「森」という人物に対応している。

⑧「この騒ぎ」……この騒ぎを実見した人の話によると、……(3:49)

これは、先行文脈中に対応する先行詞をさがすことができない。少なくとも前段落（あるいは、それ以上の段落）で述べられた「こと」を「騒ぎ」としてとらえ直し、表現している。

「その+名詞」

⑨「その船」……その船へ乗り組んでいる連中は、中々勇ましがっている所の騒ぎではない。(1:8~9)

前文中の「……五百石積の金毘羅船が、皆それぞれ、……」の「船」に対応するが、その一つ前の段落の「……船を出した。」の「船」にも対応が考えられる。

⑩「その船」……その船の中では、……虱を飼う連中が出て来た。(3:1~2)

これは、近い先行文脈中に先行詞をさがせない例である。先行詞を求めていくとずっと前の方までさかのぼることになる。⑩は第三章の冒頭文にあり、対応するものは第二章の冒頭文「所が佃組の船に、妙な男が一人いた。」の「船」ということになる。第二章は「船」の中の「妙な男」の話であり、章が変わって「それから、その船の中では、……」とストーリーを展開するにあたり、場面を再説明、再提示しているわけである。この「その」の用法に関しては、IV節に言及がある。

- ⑪「その取った虱」……その取った虱を、一刻銘に懷へ入れて、大事に飼って置くだけである。(3:4~5)

「取った」が加わった分だけ 今までの例とは違う。「取った虱」と言っているのは、前文中の「この連中も、……虱を追いかけている……」の追いかけた結果の表現だからとも考えられる。ともかく前文中の「虱」に対応する。

- ⑫「その身体」……自、好んでその身体を、虱如きに食わせるのは、不幸も亦甚しい。(3:22~23)

前文中の「……身体髪膚之を父母に受く、……」の「身体」にも、それを言いかえた「之」にも対応している。

- ⑬「その虱」……その虱を取って食うなどとは、恩を仇でかえすも同然じや。(3:40)

前文中の「この船中に一人として虱の恩を蒙らぬ者がござるか。」の「虱」に照応している。

以上、13例のうち先行詞→照応詞の関係は、先行詞そのままの形（あるいは一部分）の照応の仕方がほとんどで9例、言いかえのものが3例、先行段落のことがらを別の語で受けたのが1例であった。また、13例中、前文中に先行詞のあるものは8例、それより離れた先行文脈中にあるものは4例、直接の先行詞のないものは1例であった。これは、語形を手がかりに単純に先行詞を求めての結果である。実際は、「この」「その」と指示、限定が加わって照応詞となるわけだから、先行語句にまつわるいろいろな情報がそこに伴っているはずである。このことに関しては、Ⅲ節を参照されたい。

3. 「この」「その」の機能の検討

上記の13例について、「この」「その」の変換は可能かどうか、また「この」「その」の省略は可能かどうか、検討してみる。

まず、変換が可能かどうかについては、13例中、8例が変換可能であった

(①, ②, ③, ⑤, ⑥, ⑧, ⑩, ⑪)。変換に伴って感じられるニュアンスの差は、ごく大まかに言って、文脈の流れの中でそこに焦点を置くか（「この」の場合）、つきはなした客観的な叙述にするか（「その」の場合）といったところにある。つまり、今までにも指摘されてきたことだが、あることがらへの心理的近接の違いにより「この」、あるいは「その」が選ばれる。典型的な例として⑧「この騒ぎ」を取り上げてみると、船中の事件を叙述した後で次のように二様の言い方ができる。

⑧ $\left\{ \begin{array}{l} \text{この} \\ \text{その} \end{array} \right\}$ 騒ぎを実見した人の話によると、……

とすると、変換が可能でないもの、また多少の不自然さを感じるものは、こうした「この」「その」の性格に原因の一端があるということになる。変換可能に加えなかった5例（④, ⑦, ⑪, ⑫, ⑬）を簡単にみしてみる。④「この連中」は、⑥「この連中」と同様に変換可能としてもよいものだが、前文が「それから、その船の中では……」と始まっているので、「……その……その……」と続くことになる。この重なりあい避けることと、それに加えて上に述べたような心理的近接の問題で「この」の方が選ばれているようである。⑦「このPrécurseur」は、前文中の「森」という人物をわざわざPrécurseur といはんちゅうの中に設定し直している。こうした場合、森という人物の特性に心理的に近接するので、「この」が選ばれている。

⑨「その船」は、「この船」とするとどうも落ち着きが悪い。⑨は第一章の三つめの段落に出現しているが、この小説のスタイルとして日時や場所、出来事、事態などの大まかな客観的な描写がまず展開している。そうした中に「この」が入ると、異質感を与えるということになりそうである。

⑫「その身体」を含む文は、会話を地の文の形で展開したものの中にある。そこで、「この身体」とすると現場指示のニュアンスが出てくる。これがもっとはっきりしているのは⑬「その風」で、これは会話の中で言われている。「この風」とすると現場指示の用法になってしまう。⑫⑬の「この」「その」変換には、文脈指示か現場指示かの問題が関係しているので、ここ

では考察外とすると「この」か「その」かは、かなり自由に選ばれるものと言えそうである。

次に「この」「その」の省略の可否であるが、省略可6例(⑥, ⑧, ⑨, ⑩, ⑫, ⑬), 省略多少無理2例(③, ④), 省略不可5例(①, ②, ⑤, ⑦, ⑪)であった。省略多少無理というのは, ③「この男」, ④「この連中」のどちらもともこういう行動をした「男」, こういう行動をした「連中」というふうに限定を加えたい気持ちが働くことに関係している。③, ④の前文は, それぞれ「同役は, ……とりためた。», 「……虱を飼う連中が……。」と行動の描写である。この2例を省略可に加えることにすると, 省略可8例, 省略不可5例となる。

省略不可のうち, ①②は, 「この男だけは, ……」, 「この男だけ, ……」と「だけ」のような限定辞が加わり, 非常に強い限定指示の形をとっているものである。⑤「この男」は, 他者との対比で「この男は そうではない。」と強く限定, 指示する表現である。⑦「この Précurseur」も, 他の人物ではない, まさにその人である「この Précurseur が腹を立てた。」という表現である。⑪「その取った虱」は, 「その虱」とも「取った虱」とも言える。前者なら③④と似た問題を含み, 後者なら一応「この／その＋名詞」と別の問題となるが, ここでは「その」と「取った」で「虱」を二重に強く限定, 指示している表現である。以上述べたような特に指示限定が必要な場合には, 「この／その」が用いられるが, そうした要因がなければ「この／その」なしで済ますことができるといえそうである。

4. 「この／その＋名詞」に対応するポルトガル語の表現

考察の対象とした13例について, 『虱』のポルトガル語訳から対応する言い方を抜き出してみた。以下, 理解の便宜のため英語による直訳をできる限り語対応で付することにする。まず, 「この」「その」に分け, ①②③……の順にポルトガル語訳を提示する。

「この十名詞」

- ① 「この男」 → “ele”
he
- ② 「この男」 → (相当語句の省略)
- ③ 「この男」 → “do oficial”
of the officer
- ④ 「この連中」 → “este pessoal”
this personnel
- ⑤ 「この男」 → “deste homem”
of this man
- ⑥ 「この連中」 → “destes indivíduos”
of these individuals
- ⑦ 「この Précurseur」 → “o precursor”
the precursor
- ⑧ 「この騒ぎ」 → “essa confusão”
that confusion

「その十名詞」

- ⑨ 「その船」 → “dos barcos”
of the boats
- ⑩ 「その船」 → “no barco”
in the boat
- ⑪ 「その取った虱」 → “os piolhos”
the lice
- ⑫ 「その身体」 → “lo”
it
- ⑬ 「その虱」 → “esses piolhos”
those lice

ポルトガル語では、指示形容詞に “este”, “esse”, “aquele” の三形がある。一応、これに日本語の「この」「その」「あの」をあてて考えると、ここには “este”, “esse” とその変化形が現れている。ほかに、日本語の「この」「その」の区別に関係なく定冠詞 “o” が用いられている。また、「この／その十名詞」を表すのに代名詞が用いられたり、それ相当部分が省略されたりする。なお、⑫の “lo” は直接目的語 “o” の変化形である。用例の多かった順に整理しながら、簡単に説明を加える。必要に応じて先行文脈や先行詞に

言及する。

(1) 定冠詞 “o” を用いる…… 5 例

- ③ “do oficial” (←「この男」) ……前文が “O oficial pensou que……”
of the officer The officer thought that……

で始まり、その同一人物について “A intenção verdadeira do oficial……”
The intention true of the officer……

と描写を続けている。“O oficial” が繰り返えされている。
The officer

- ⑦ “o precursor” (←「この Précurseur」) ……前文中の “Quando chegou”
the precursor When arrived

Mori, ……」の “Mori” という人物をこう言いかえている。
Mori, ……

- ⑨ “dos barcos” (←「その船」) ……前文中にある “o cenário das enormes”
of the boats the scenery of the enormous

galeras” の “as galeras” を “os barcos” で言いかえている。その一つ前
vessels the vessels the boats

の段落には “……largou o porto na foz do rio Aji……” とあるが、
……sailed from the port in the mouth of the river Aji……

そこには「船」を直接言う語はない。

- ⑩ “no barco” (←「その船」) ……⑩は第三章の冒頭文の中にあり、その
in the boat

先行詞は、日本語ではさがすとすれば、ずっとさかのぼって第二章の冒頭文
「所が佃組の船に、妙な男がいた。」の「船」であった。ところが、ポルトガ
ル語訳では、“no grupo de Tsukuda havia um tipo esquisito” となって
in the group of Tsukuda there was a type odd

おり、“barco” 等は出現していない。無理にさがすとすれば第一章まで戻る
boat

ことになるが、そうしなくても “o barco” でここはわかることであるとい
the boat

うことになる。

- ⑪ “os piolhos” (←「その取った虱」) ……ポルトガル語訳では、「取っ
the lice

た」の部分が表現されていない。前文中の “…… em ir atrás dos piolhos”
…… in going after of the lice

.....”という行為の結果, “..... guardava os piolhos.....”という行為に
..... (they) guarded the lice

移行するのであるが, 「取った」をあえて言わなくてもわかることなのだ,
と言えそうである。“os piolhos” は, 繰り返しである。
the lice

(2) 指示形容詞 “este” を用いる…… 3 例
this

④ “este pessoal” (←「この連中」) …… 前文中の “os seguidores de
this personnel the followers of

Mori que” の “os seguidores” に対応している。説明の伴った “os
Mori who the followers the

seguidores” を “este pessoal” と言いかえているのである。
followers this personnel

⑤ “deste homem” (←「この男」) ……この人物は, この段落ではじめて
of this man

登場するが, “Inoue Tenzo” → “Este” → “este homem” → “lhe” → “ele”
This this man him he

と続いて, ⑤になる。⑤は, 同文中の “..... quem esmagasse os piolhos
(one) who would crush the lice

à boca” に対比して “o caso deste homem” である。
by the mouth the case of this man

⑥ “destes indivíduos” (←「この連中」) ……前文中の “.....eram muitos
of these individuals there were many

os adeptos da” の “os adeptos” を受けて, “Os argumentos destes
the followers of the the followers The arguments of these

indivíduos” と続いていく。
individuals

(3) 指示形容詞 “esse” を用いる…… 2 例
that

⑧ “essa confusão” ← (「この騒ぎ」) ……前段落で述べられたこと (あ
that confusion

るいは, それ以上の段落も含めて) を⑧の言い方で表現している。

⑬ “esses piolhos” ← (「その虱」) ……前文中の “piolhos” を受けてい
those lice lice

る。

(4) 人称代名詞を用いる…… 2 例

- ① “ele” ← (「この男」) ……代名詞は、文脈の中にすでに出現した人物や
he

事物についての叙述を続ける際に文法的に要求される言いかえの義務である。ただ、主語に関しては、あえて言う必要のない場合は省かれる。①は主語のある例である。①の文が含まれる段落内では、“.....havia um tipo
..... there was a type

esquisito.” → “(主語なし) era um homem de” → “ele não tirava
odd. he was a man of..... he not took off
piolhos.” と展開している。
lice.

- ② “lo” ← (「その身体」) ……前文中の “o corpo (com a sua pele e
it the body (with the his skin and

os cabelos)” を文法的に要求される目的語に言いかえるだけにしている。
the hair)

(5) 相当語句を省略する…… 1 例

② (省略) ← (「この男」) ……主語が省かれている例である。上記①の文を含む段落は、ある人物と風の関わりあいの描写であった。段落が変わって、さらにその描写が続いていくが、「この男」相当語句をここでは略して、特に言わなかったのである。

5. ポルトガル語の “este/esse/o+名詞”，また代名詞についてのいくつかの問題

上記ポルトガル語の例について、以下の観点から整理し、簡単な説明を加える。

- (1) “esse+名詞” の形で言えるか
that

もともと “esse” を用いたものは 2 例しかなかったが、それも含めて 13 例
that

全てがこの形で言える。その場合、上に述べてきた、あるいは、すでに述べた、その、というニュアンスを伴うようである。また、“este” の今、これから述べようとする、まさに、この、というニュアンスに対しては中立的な意

味合いとなるようである。ただ、⑦ “o precursor” に関しては、“esse” を用
the precursor that

いてあえて “esse precursor” と言わなくてもよいという感じである。つま
that precursor

り、定冠詞の問題とつながるが、そうした指示が必要のない表現なのである。

(2) “este+名詞” の形で言えるか
this

“este” が用いられていた 3 例を除くと、“este” でも、まあ、よいという
this

のが 8 例、無理、あるいは、? というのが 2 例である。“esse” の場合に比
that

べて “este” の方には用法に関する強い制限があるようである。“este” でも、
this

まあ、よいは、定冠詞付きの 5 例 (③, ⑦, ⑨, ⑩, ⑪), 代名詞のもの
(①, ⑫), 相当語句省略のもの (②) に渡るが、無理、あるいは、? の 2 例
(⑧, ⑬) は、ポルトガル語で “esse” が用いられていた 2 例、そのものであ
that

る。“este” は、“esse” に容易に置き換えられない。ただ、上記 (1) でみると
おりその逆は言えない。また、日本語との対照では、“esses piolhos” (「そ
those lice

の虱」), “essa confusão” (「この騒ぎ」) というぐあいに別の原則が働いて
that confusion

いるようである。

(3) “o+名詞” の形で言えるか

日本語での「この」「その」の用いられ方と関係なく、つまりその両方に
渡って定冠詞は用いられ、その用例も 5 例 (③, ⑦, ⑨, ⑩, ⑪) であり、
“este” や “esse” の用例よりも数が多い。“este” や “esse” は先に簡単に
this that this that

触れたようなニュアンスを持つが、定冠詞 “o” にはそのようなニュアンスは
なく、ただ先行文脈中の先行詞に照応していることのみを文法的に示す、と
考えられる。先の 5 例を除くと、定冠詞でも、まあ、よいが 4 例 (①, ②,
⑤, ⑧) であり、この 4 例は、①が代名詞のもの (“ele”), ②が相当語句省
he

略のもの、⑤が“este”を用いたもの、⑧が“esse”を用いたものである。
this that

無理、あるいは、?の例は3例(④, ⑥, ⑬)で、やはり“este”, “esse”の両
this that

方に関わっている。

- (4) “este”, “esse”, “o” で限定せず、名詞だけの形で言えるか
this that the

これは、13例全てについてダメである。ここで問題となっている名詞は、
文脈上何らかの限定を必要とするものばかりである。“homem”とか“barco”
man boat

とか言うとき、一般や全体、また不定のものを指すことになってしまう。日本語で特に限定する必要がない限り、「この／その」を用いなくてもよいのとは大きな違いを示す。

- (5) 代名詞の形で言えるか

“ele” (①) “lo” (⑫) が使われた例を除く11例のうち、ふつうに言えるが
4例(⑤, ⑥, ⑦, ⑨), 代名詞でもまあ、よいが3例(②, ⑪, ⑬), まあまあ、
あるいは、?が1例(⑧), ダメが3例(③, ④, ⑩)であった。ダメな例か
らみていくと、④では“eles”と言い変えた場合、前文中の“os seguidores”
they the followers

de”を指すのか、“pilhos”を指すのか、あいまいになるからである。③
of lice

の例も同様である。⑩は、先行詞のさがしにくいものであった。したがって、
代名詞を用いると何を指しているのかわからなくなる例である。次に、
まあまあ、あるいは、?である⑧をみると先行詞のなかった例で、述べられ
たことを“confusão”とか“fato”とか言い直したい気持ちがあるところであ
confusion fact

る。

代名詞でもまあ、よいの3例については、文脈の流れからみて特にそのこと
を言うか文法的義務による語で表すかの違いによるところが大きい。ふつ
うに言える4例についても、特にそれを言い表すかどうかが大きく関係して
いるということになる。

	用	例	esse + 名詞	este + 名詞	o + 名詞	名詞のみ	代 名 詞
①	ele (he)	「この男」	◎	○	○	×	☆ ele (he)
②	省略	「この男」	◎	○	○	×	○ ele (he)
③	do oficial (of the officer)	「この男」	◎	○	☆	×	×
④	este pessoal (this personnel)	「この連中」	◎	☆	?	×	×
⑤	deste homem (of this man)	「この男」	◎	☆	○	×	◎ dele (of he)
⑥	destes indivíduos (of these individuals)	「この連中」	◎	☆	×	×	◎ deles (of they)
⑦	o precursor (the precursor)	「この Précurseur」	○	○	☆	×	○ ele (he)
⑧	essa confusão (that confusion)	「この騒ぎ」	☆	?	○	×	? isso (it)
⑨	dos barcos (of the boats)	「その船」	◎	○	☆	×	◎ dele (of it)
⑩	no barco (in the boat)	「その船」	◎	○	☆	×	×
⑪	os piolhos (the lice)	「その取った虱」	◎	○	☆	×	○ os (them)
⑫	lo (it)	「その身体」	◎	○	×	×	☆ lo (it)
⑬	esses piolhos (those lice)	「その虱」	☆	?	?	×	○ los (them)

以上、非常に簡単な説明を加えた。273ページは、これを一覧表にしたものである。この表では、次のような記号を用いた。☆(翻訳対応語)、◎(言い変えてもふつうである)、○(まあ、それでもよい)、?(無理)、×(ダメ)。なお、代名詞については上で特に語形をあげなかったもので、表に書き込んだ。

『虱』をテキストに、日本語での「この／その＋名詞」に含まれる問題の一部、またそれに対応するポルトガル語の言い方に含まれる問題について簡単にみてきた。不十分ではあったが、これは、日本語、ポルトガル語それぞれにおける指示詞等や名詞の用法、またそれらの対照を考えていくための基礎作業の一部である。

(日向茂男)

(注) 『虱』のポルトガル語訳は、今回の作業のためわざわざ長島幸子さん(元上智大学非常勤講師)にお願いした。また、ポルトガル語についてのネイティブ・チェックは、日向ノエミヤさん(上智大学非常勤講師)に協力を求めた。両者ともブラジルで生まれ、小学校から大学までの教育をブラジルで終えている日系二世である。厚く御礼申し上げる。

<参考文献>

- Halliday, M.A.K. and Ruqaiya Hasan 1976 *Cohesion in English* (English Language Series No. 9) Longman
- Harimurti Kridalaksana 1972 “*nya* Sebagai Penanda Anafora,” *Dewan Bahasa*, [Kuala Lumpur: Dewan Bahasa Dan Pustaka]
- 林 四郎 1972 「指示連体詞『この』『その』の働きと前後関係」『電子計算機による国語研究Ⅳ』(『国立国語研究所報告46』)
- 堀口和吉 1988 「指示語『コ・ソ・ア』考」(『論集日本語5 現代』) 角川書店
- 国立国語研究所 1963 『話しことばの文型(2)―独話資料による研究―』(『国立国語研究所報告23』)
- 香坂順一 1976年 『中国語学の基礎知識』(第3版) 光生館
- Lyons, John 1977 *Semantics 2* Cambridge University Press
- Reinhart, Tanya 1983 *Anaphora and Semantic Interpretation* Croom Helm
- Scoemarmo 1970 *Subject-Predicate, Focus-presupposition, and Topic-comment in Bahasa Indonesia and Javanese*. Ph. D. Dissertation, UCLA

- 正保 勇 1981 「『コソア』の体系」『日本語の指示詞』（日本語 教育指導参考書 8）
国立国語研究所
- 田中 望 1981 「『コソア』をめぐる諸問題」（同上）
- 寺津典子，稲田俊明，山梨正明 1980 「日本語における照応現象について（その二）」
『計算機による日本語談話行動の総合モデル化 昭和54年度研究報告書』 昭和54年
度文部省科学研究費 15—60
- 寺津典子，山梨正明 1979 「日本語における照応現象について（その一）」『計算機に
よる日本語談話行動の総合モデル化 昭和53年度研究報告書』 昭和53年度文部省科
学研究費 61—87
- Wasow, Thomas 1979 *Anaphora in Generative Grammar* (SIGLA Vol. 2) E.
Story-Scientia P.V.B.A.

VII 資料

風

1

元治元年十一月二十六日、京都守護の任に当たっていた、加州家の同勢は、折からの長州征伐に加わる為、国家老の長大隅守を大將にして、大阪の安治川口から、船を出した。

小頭は、佃久太夫、山岸三十郎の二人で、佃組の船には白幟、山岸組の船には赤幟が立っている。五百石積の金毘羅船が、皆それぞれ、紅白の幟を風にひるがえして、川口を海へのり出した時の景色は、如何にも勇ましいものだったそうである。 5

しかし、その船へ乗組んでいる連中は、中々勇ましがっている所の騒ぎではない。第一どの船にも、一般に、主従三十四人、船頭四人、併せて三十八人ずつ乗組んでいる。だから、船の中は、皆、身動きも碌に出来ない程狭い。それから又、胴の間には、沢庵漬を鰯桶へつめたのが、足のふみ所もない位、ならべてある。慣れない内は、その臭気を嗅ぐと、誰でもすぐに、吐き気を催した。最後に旧暦の十一月下旬だから、海上を吹いて来る風が、まるで身を切るように冷い。殊に日が暮れてからは、摩耶風なり水の上なり、流石に北国生れの若侍も、多くは齒の根が合わないと言ふ始末であった。 10 15

その上、船の中には、風が沢山いた。それも、着物の縫目にかくれているなどと云う、生やさしい風ではない。帆にもたかっている。幟にもたかっている。櫓にもたかっている。錨にもたかっている。少し誇張して云えば、人間を乗せる為の船だから、風を乗 20

せる為の船だか、判然しない位である。勿論その位だから、着物には、何十匹となくなっている。そうして、それが人肌にさえざわれれば、すぐに、いい気になって、ちくちくやる。それも五匹や十匹なら、どうしても、せいのうのしようがあるが、前にも云った通り、白胡麻をふり撒いたように、沢山いるのだから、とても、とりつくすなどと言う事が出来る筈のものではない。だから、佃組と山岸組とを問わず、船中にいる侍と云う侍の体は、悉く虱に食われた痕で、まるで疥癬にでも罹ったように、胸と云わず腹と云わず、一面に赤く腫れ上っていた。 25 30

しかし、いくら手のつけようがないと云っても、そのまま打遣て置くわけには、猶行かない。そこで、船中の連中は、暇さえあれば、虱狩をやった。上は家老から下は草履取まで、悉く裸になって、随所にいる虱をてんでに茶呑茶碗の中へ、取っては入れ、取っては入れするのである。大きな帆に内海の冬の日をうけた金毘羅船の中で、三十何人かの侍が、湯もじ一つに茶呑茶碗を持って、帆綱の下、錨の陰と、一生懸命に虱ばかり、さがして歩いた時の事を想像すると、今日では誰しも滑稽だと云う感じが先に立つが、「必要」の前に、一切の事が真面目になるのは、維新以前と雖も、今と別に変りはない。——そこで、一船の裸侍は、それ自身が大きな虱のように、寒いのを我慢して、毎日根気よく、そこそこ歩きながら、丹念に板の間の虱ばかりつぶしていた。 35 40

2

所が佃組の船に、妙な男が一人いた。これは森権之進と云う中老のつむじ曲りで、身分は七十俵五人扶持の御徒士である。この男だけは不思議に、虱をとらない。とらないから、勿論、何処と云わず、たかっている。雷ぶしへのぼっている奴があるかと思うと、袴腰のふちを渡っている奴がある。それでも別段、気にか 5

る容子が無い。

ではこの男だけ、虱に食われないのかと云うと、又そうでもない。やはり外の連中のように、体中金銭斑々^{きんせんはんはん}とでも形容したらよ
かろうと思う程、所^{ところ}まだらに赤くなっている。その上、当人がそ
れを掻いている所を見ると、痒くない訳でもないらしい。が、痒 10
くっても何でも、一向平気ですましている。

すましているだけなら、まだいいが、外の連中が、せっせと虱
狩をしているのを見ると、必^{かならず}わきからこんな事を云う。――

「とるなら、殺し召さるな。殺さずに茶碗へ入れて置けば、わし
が貰うて進ぜよう。」 15

「貰うて、どうさっしゃる?」 同役の一人が、呆れた顔をして、
こう尋ねた。

「貰うてか。貰えばわしが飼うておくまでじゃ。」

森は、恬然^{てんぜん}として答えるのである。

「では殺さずにとつて進ぜよう。」 20

同役は、冗談だと思ったから、二三人の仲間と一しょに半日が
かりで、虱を生きたまま、茶呑茶碗へ二三杯とりためた。この男
の腹では、こうして置いて「さあ飼え」と云ったら、いくら依怙^{いこ}
地な森でも、閉口するだろうと思ったからである。

すると、こっちからはまだ何とも云わない内に、森が自分の方 25
から声をかけた。

「とれたかな。とれたらわしが貰うて進ぜよう。」

同役の連中は、皆、驚いた。

「ではここへ入れてくれさっしゃい。」

森は平然として、着物の襟をくつろげた。 30

「瘦我慢をして、あとでお困りなさるな。」

同役がこう云ったが、当人は耳にもかけない。そこで一人ずつ、
持っている茶碗を倒にして、米屋が一合杓^{ます}で米をはかるように、ぞ

ろぞろ虱をその襟元へあけてやると、森は、大事そうに外へこぼれた奴を拾いながら、

35

「有難い。これで今夜から暖に眠られるて。」という独語を云いながらにやにや笑っている。

「虱がいると、暖うござるかな。」

呆気にとられていた同役は、皆互に顔を見合せながら、誰に尋ねるともなく、こう云った。すると、森は、虱を入れた後の襟を、丁寧に直しながら、一応、皆の顔を莫迦にしたように見まわして、それからこんな事を云い出した。

40

「各々は皆、この頃の寒さで、風をひかれるがな、この櫛之進はどうじゃくまもせぬ、はな漢もたらさぬ。まして熱が出たの、手足が冷えるの云う覚は、嘗てあるまい。各々はこれを、誰のおかげじゃと思わっしゃる。——みんな、この虱のおかげじゃ。」

45

何でも森の説によれば、体に虱がいると、必ちくちく刺す。刺すからどうしても掻きたくなる。そこで、体中万遍なく刺されると、やはり体中万遍なく掻きたくなる。所が人間と云うものはよくしたもので、痒い痒いと思って掻いている中に、自然と掻いた所が、熱を持ったように温くなって来る。そこで温くなってくれば睡くなって来る。睡くなってくれば、痒いのもわからない。——こう云う調子で、虱さえ体に沢山いれば、睡つきもいいし、虱もひかない。だからどうしても、虱飼うべし、狩るべからずと云うのである。……

55

「成程、そんなものでござるかな。」同役の二三人は、森の虱論を聞いて、感心したように、こう云った。

それから、その船の中では、森の真似をして、虱を飼う連中が出来て来た。この連中も、暇さえあれば、茶呑茶碗を持って虱を追いかけている事は、外の仲間と別に変わらない。唯、ちがうのは、その取った虱を、——一刻銘に懷に入れて、大事に飼って置くだけである。

5

しかし、何処の国、何時の世でも Précurseur の説が、そのまま何人にも容れられると云う事は滅多にない。船中にも、森の虱論に反対する、Pharisien が大勢いた。

中でも筆頭第一の Pharisien は井上典蔵と云う御徒士である。これも亦妙な男で、虱をとると必ず皆食ってしまう。夕がた飯をすませると、茶呑茶碗を前に置いて、うまそうに何かぶつりぶつり喰んでいるから、側へよって茶碗の中を覗いて見ると、それが皆、とりためた虱である。「どんな味でござる?」と訊くと、「左様さ。油臭い、焼米のような味でござろう」と云う。虱を口でつぶす者は、何処にでもいるが、この男はそうではない。全く点心を食う気で、毎日虱を食っている。——これが先、第一に森に反対した。

井上のように、虱を食う人間は、外に一人もいないが、井上の反対説に加担をする者は可成いる。この連中の云い分によると、虱がいたからと云って、人間の体は決して温まるものではない。それのみならず、孝経にも、身体髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なりとある。自、好んでその身体を、虱如きに食わせるのは、不孝も亦甚しい。だから、どうしても虱狩るべし。飼うべからずと云うのである。……

20

こう云う行きがかりで、森の仲間と井上の仲間との間には、時 25
折口論が持上がる。それも、唯、口論位ですんでいた内は、差支
えない。が、とうとう、しまいには、それが素で、思いもよらな
い刃傷沙汰さえ、始まるような事になった。

それと云うのは、或日、森が、又大事に飼おうと思って、人か
ら貰った虱を茶碗へ入れてとって置くと、油断を見すまして井上 30
が、何時の間にかそれを食ってしまった。森が来てみると、もう
一匹もない。そこで、この Précurseur が腹を立てた。

「何故、人の虱を食わした。」

張肘はりひじをしながら、眼の色をかえて、こうつめよると、井上は、
「自休、虱を飼うと云うのが、たわけじゃての。」と空嘸そらうそぶいて、ま 35
るで取合うけしきがない。

「食う方がたわけじゃ。」

森は、躍起となって、板の間をたたきながら、

「これ、この船中に、一人として虱の恩を蒙こうむらぬ者がござるか。
その虱を取って食うなどとは、恩を仇でかえすも同然じゃ。」 40

「身共は、虱の恩を着た覚えなどは、毛頭ござらぬ。」

「いや、たとい恩を着ぬにもせよ、妄みだりに生類しやうるいの命を断つなどとは、
言語道断でござろう。」

二言三言云いつのったと思うと、森がいきなり眼の色を変えて、
蝦蛄えびがま巻の柄に手をかけた。勿論、井上も負けてはいない。すぐに、 45
朱鞘の長物をひきよせて、立上る。——裸で虱をとっていた連中
が、慌てて兩人を取押えなかったら、或はどちらか一方の命にも
関る所であった。

この騒ぎを実見した人の話によると、二人は、一同に抱きすく
められながら、それでもまだ口角に泡を飛ばせて、「虱。虱。」と 50
叫んでいたそうである。

こう云う具合に船中の侍たちが、風の為に刃傷沙汰を引起している間でも、五百石積の金毘羅船だけは、まるでそんな事には頓着しないように、紅白の轅を寒風にひるがえしながら、遥々として長州征伐の途に上るべく、雪もよいの空の下を、西へ西へと走って行った。

現代日本文学英訳選集（5）「羅生門」（原書房）より